



No.4 SK041 (西から)



No.5 第⑪層上面（南から）



No.6 第⑤層上面（南から）



No.7 第⑥層上面（北から）



No.8 第⑦層下面（東から）



No.9 第③層下面（西から）



No.10 第③層下面（北から）



No.11 第⑦層上面（西から）



No.12 第⑥層上面（東から）



No.13 第⑦層上面（北から）



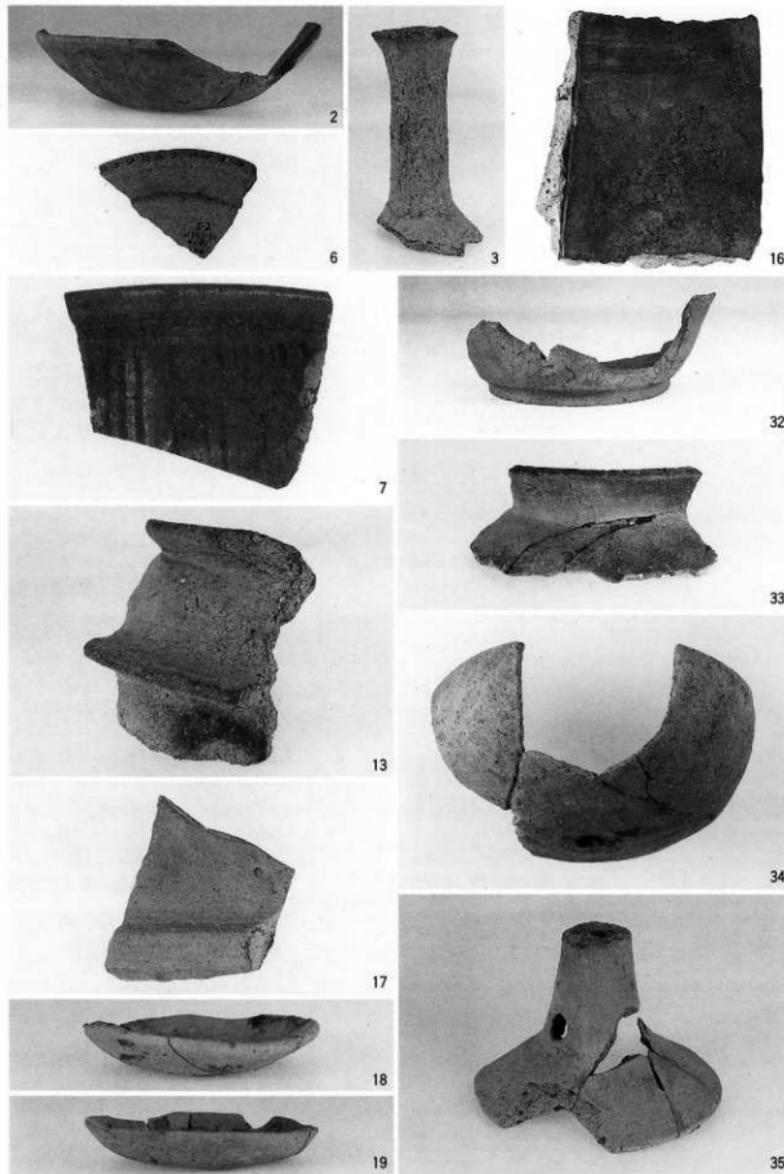
No.14 最終面上面（東から）



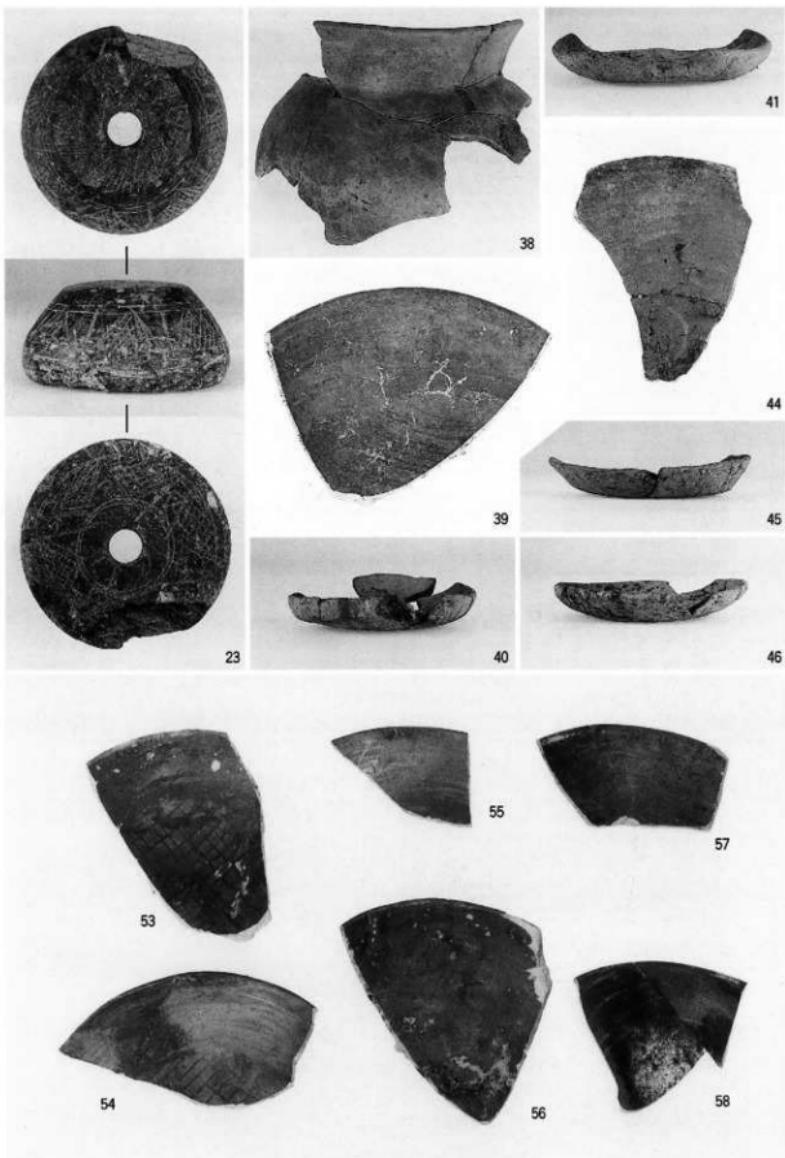
No.15 調査状況



No.16 調査状況



No.1 (2・3・6)、No.2 (7)、No.3 (13・16・17)、No.4 (18・19)、No.8 (32～35)



No.4 (23)、No.8 (38)、No.9 (39~58)



59



60



61



62



63



—



65



|



67

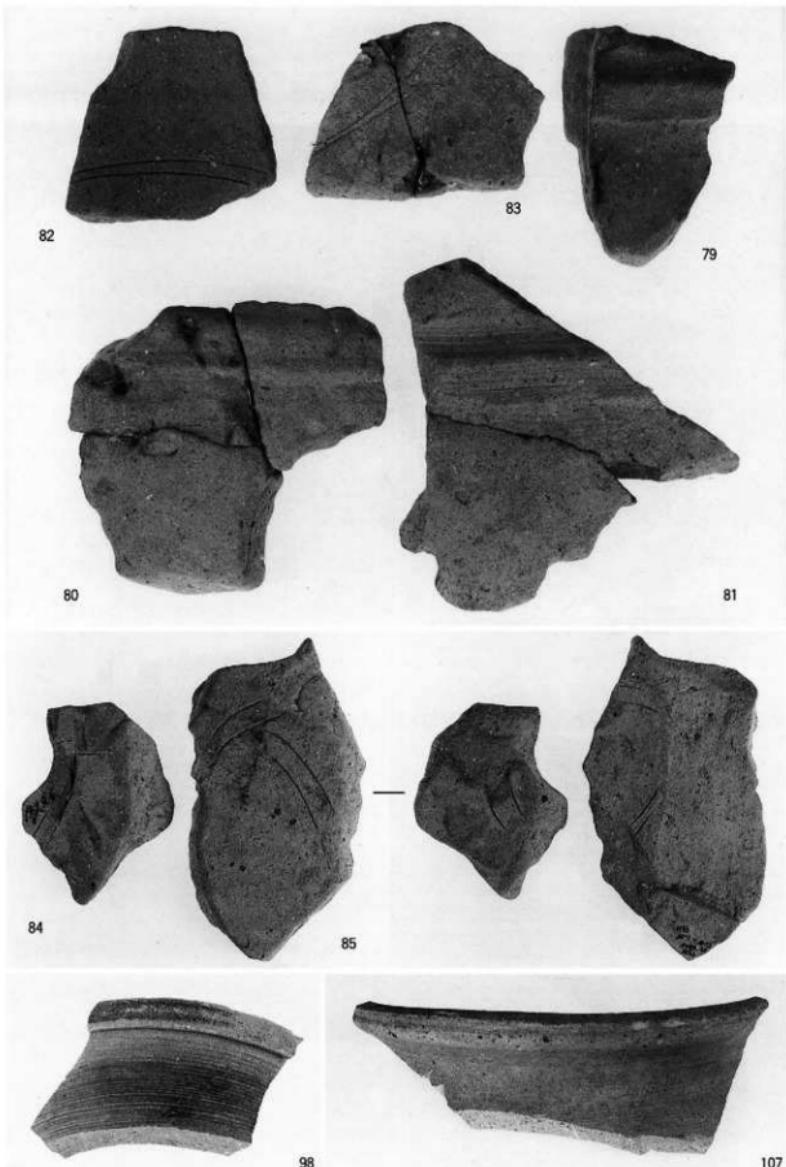


|



76

No.9 (59~67)、No.10 (76・77)



No.10 (79~85)、No.13 (98・107)



No.12 (91)、No.13 (96・110)、No.14 (116～125)

V 東弓削遺跡第7次調査(HY94-7)

例　　言

- 1 本書は、大阪府八尾市八尾木東1丁目～2丁目地内で行った、公共下水道工事（平成5年度～24工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1 本書で報告する東弓削遺跡第7次調査（HY94-7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第93号 平成5年11月10日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成6年4月8日から平成6年5月18日にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
- 1 調査面積は約48m²を測る。
- 1 現地調査には磯上サカエ、宮崎寛子、村井俊子が参加した。内業整理には上記のほか、澤井幹、高柳恵美、西田寿が参加した。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	127
第2章 調査の方法と経過.....	130
第3章 検出遺構と出土遺物の概要.....	130
第1節 1区の概要.....	130
1) 基本層序.....	130
2) 検出遺構と出土遺物.....	131
第2節 2区の概要.....	143
1) 基本層序.....	143
2) 検出遺構と出土遺物.....	144
第3節 出土遺物観察表.....	145
第4章 調査の成果.....	154

挿図目次

第1図	調査地周辺図 (S = 1 / 6000)	128
第2図	調査区設定図 (S = 1 / 1000)	130
第3図	1区103層(1・2) 105層(3) 出土遺物実測図	130
第4図	1区東側壁面柱状図 (S = 1 / 50)	131
第5図	落ち込み(105層上面)遺物出土状況平面図 (S = 1 / 50)	132
第6図	104層出土遺物実測図-1	133
第7図	104層出土遺物実測図-2	134
第8図	104層出土遺物実測図-3	135
第9図	104層出土遺物実測図-4	137
第10図	104層出土遺物実測図-5	139
第11図	104層出土遺物実測図-6	141
第12図	104層出土遺物実測図-7	142
第13図	2区東側壁面柱状図 (S = 1 / 50)	143
第14図	2区204層(168~170)・207層(171・172)出土遺物実測図	144
第15図	206層出土遺物実測図	144

図版目次

図版一	1区落ち込み(105層上面)東部(南から)、同西部(北から)
図版二	1区調査風景、2区調査風景、2区207層上面全景(東から)
図版三	1区104層出土遺物-1
図版四	1区104層出土遺物-2
図版五	1区104層出土遺物-3
図版六	1区104層出土遺物-4
図版七	1区104層出土遺物-5
図版八	1区104層出土遺物-6
図版九	1区104層出土遺物-7
図版十	1区104層出土遺物-8・2区207層出土遺物

第1章 はじめに

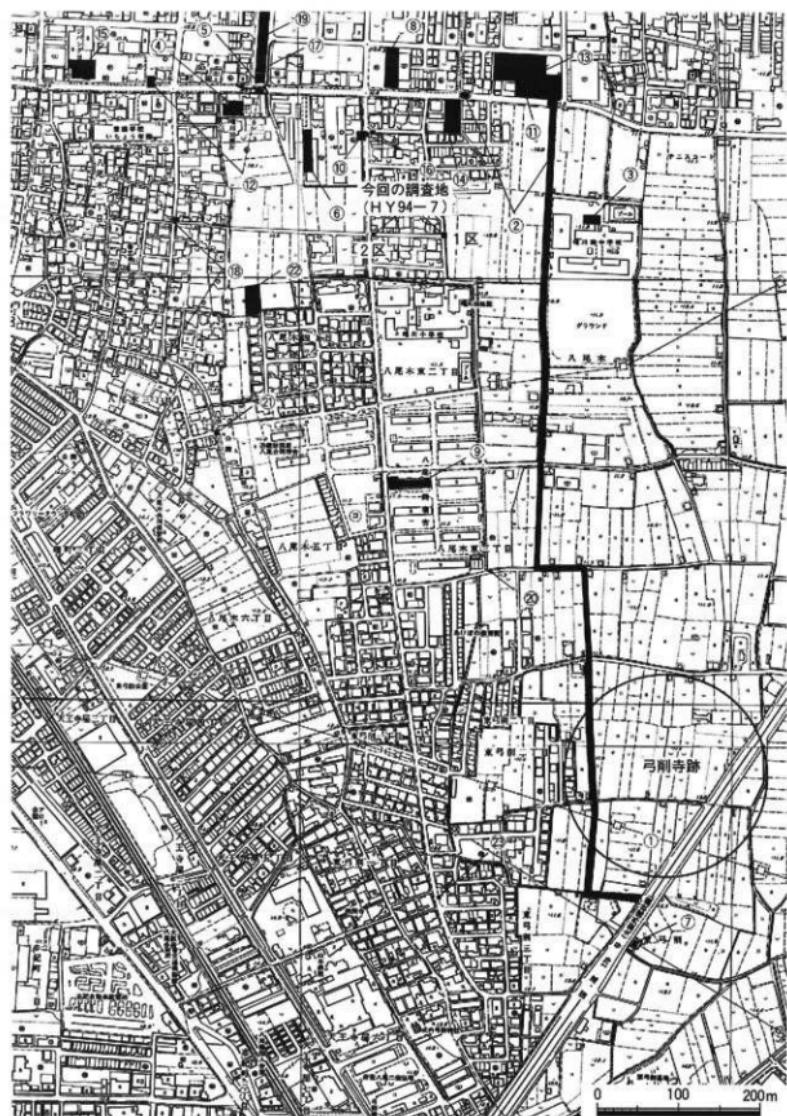
東弓削遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川の分岐点である「二俣」から北東に広がる沖積地の基部に位置しており、行政区画では、東弓削1～3丁目・八尾木東1～3丁目・八尾木・都塚・刑部にあたる。この長瀬川と玉串川に挟まれた地区は、市内でも遺跡密度の高いところで、当遺跡と同様の条件で、中田遺跡・矢作遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡などが当遺跡の北から西に連なって位置している。また、当遺跡の東側にあたる玉串川を挟んだ扇状地上には恩智遺跡・神宮寺遺跡が、長瀬川を挟んだ南から西側には、弓削遺跡・老原遺跡・志紀遺跡などが位置している。

当遺跡周辺は、その地名が示すように、弓削氏の本貫地として知られているところで、古くから奈良時代の僧「弓削道鏡」に関わる寺跡・宮跡の所在地として伝承されており、近辺には、由義神社（八尾木北5丁目一中田遺跡）、弓削神社（東弓削1丁目・弓削町2丁目の2社）、が位置している。また、「続日本紀」にみられる「弓削寺（由義寺）」や「弓削行宮（由義宮）」の所在に関して、江戸時代以来、「河内誌」・「河内名所図絵」・「大阪府誌」・「大阪府全誌」・「中河内郡誌」・「中河内郡廢寺」などによって研究が進められてきた土地である。

この地の歴史的な背景が考古学的な遺物から明らかにされたのは、昭和42(1967)年、国道170号線（大阪外環状線）敷設関連工事の際、東弓削2丁目～3丁目で、奈良時代の屋瓦片や土器類が出土したことによる。これらの遺物を発見・採集された山本 弘氏はこの地に前述の寺跡・宮跡を想定され、それとともに弥生時代の遺物も含まれていることも報告された(①)。

その後の昭和50(1975)年、大阪府水道部による送水管布設工事が東弓削・八尾木地区で実施されることになり、八尾市教育委員会では発掘調査を実施することになった。この調査では、遺跡範囲をほぼ南北に貫くトレンチを設定した形となり、多大な成果が得られた。とくに、調査地南部では、奈良時代から鎌倉時代にかけての瓦片を含む礫混じりの整地層があったことから、「奈良時代から鎌倉時代末期まで存続していた建物のあったこと、建物廃絶後は整地され、水田化したこと」が明らかになり、山本 昭氏は、「江戸時代以来考証してきた弓削寺関係の遺址とみてよい」と述べられている。この地周辺が先の山本 弘氏の遺物発見・採集地点に合致しており、以来、弓削氏の氏寺である「弓削寺跡」の推定地として周知されることになった。一方、下層部分では、遺跡中央部で古墳時代中期の円筒埴輪・盾形埴輪・家形埴輪などがまとまって出土したほか、中田遺跡と接する遺跡北部では、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の土器類が多量に出土し、当地が弥生時代中期にまで溯り得る複合遺跡であることが確認され、その豊富な内容が明らかになった(②)。

その後、当遺跡内では、昭和57(1982)年に当調査研究会が、市立曽川中学校の校舎増設に伴って発掘調査を実施したのをはじめとし、それ以降平成7(1995)年度までに、当調査研究会および市教育委員会で12件の発掘調査を実施している。これまでの調査では、おおむね遺跡中央東部から南部にかけては古墳時代後期の埴輪(②)、奈良時代～鎌倉時代の屋瓦・整地層(⑦)、鎌倉時代以降の水田遺構(③・⑦・⑨)などが検出されている。一方、遺跡北部から中田遺跡南部にかけては、おもに弥生時代中期(④・⑥・⑩・⑫・⑯)、弥生時代後期～古墳時代前期(⑤・⑧・⑨・⑪・



第1図 調査地周辺図 ($S = 1/6000$)

⑯・⑰・⑲・⑳の遺構・遺物が検出されているほか、(㉑)では平安時代の寺院跡の可能性がある遺構・遺物も検出されている。また、旧大和川(長瀬川)にちなみ各時代の埋没河川や洪水層なども確認されており、(㉒)では弥生時代中期以前、(㉓・㉔)では古墳時代後期以前、(㉕)では室町時代、(㉖)では中世以前の旧大和川の本流(長瀬川)が確認されている。今回の調査地は、八尾木東1丁目に所在しており、遺跡範囲の北よりに位置している。近辺には、東に第1次(㉗)・南に第3次(㉘)・西側に第6次(㉙)・94-484(㉚)、北側に市教委61年度(㉛)・第4次(㉕)・第5次(㉖)・91-373(㉗)の調査地点がある。

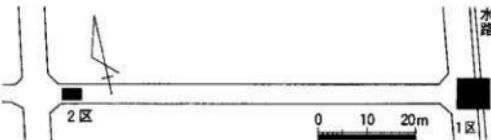
表1 周辺の発掘調査一覧表(番号は参考文献と共に)

番号	遺跡名	調査主体 (略号)	調査期間	調査地	面積	調査原因	調査結果
①			1967年	東弓削～郡塚		国道170号線 右側開通	弥生時代～上器　奈良時代～瓦・綠釉陶器
㉗	東弓削	山教委	751208 ~760331	東弓削～八尾木	(m²) 4000	送水管設置	弥生中期～古墳時代中期～遺物包含層・埴輪 奈良～鎌倉～建物・塚地層
㉘	東弓削	研究会 (HY82-1)	821013 ~821018	八尾木167	65	中学校建設	古墳前期～遺物包含層 平安末～鎌倉～水田　室町～溝
㉙	中田	研究会 (八尾木地区)	840202 ~840219	八尾木4	220	コミュニティ センター建設	弥生中期～土坑・焼土坑・沼沢地
㉚	中田	府教委	8508	八尾木5		公共下水道	古墳前期～不明遺構
㉛	中田	市教委 (61年度)	860912 ~861213	八尾木4～4～5	144	共同住宅建設	弥生中期～煮棺・庄内期～土器
㉜	東弓削	研究会 (HY86-2)		東弓削102～1	50	送電塔建設	鎌倉末期以降～斎地層　室町以降～水田
㉝	中田	市教委 (86-532)	870819 ~870905	八尾木北6～	68	共同住宅建設	古墳前期～溝
㉞	東弓削	研究会 (HY88-3)	890106 ~890220	八尾木東3～38	594	国家公務員宿 舎建設	弥生後期～古墳前期～落ち込み・小穴 平安～鎌倉～水田　庄内期～溝
㉟	東弓削	研究会 (HY88-4)	890106 ~890123	八尾木東1	72	公共下水道	弥生中期～上坑・庄内期～溝 古墳中期～遺物包含層
㉟	中田	市教委 (89-331)	89021	刑部3	4	事務所・住宅 建設	占墳～遺物包含層
㉟	中田	研究会 (NT89-3)	891202 ~900331	八尾木北4～5	132	公共下水道	弥生中期～土坑・小穴・河川 庄内期～土坑・小穴
㉟	中田	市教委 (90-330)	901023	刑部3	11.25	倉庫建設	古墳～奈良～遺物包含層
㉟	東弓削	研究会 (HY90-5)	901119 ~901206	八尾木東1～94	177	共同住宅建設	古墳前期～中期～土坑・小穴・溝
㉟	中田	研究会 (NT91-8)	911105 ~911201	八尾木北5～98	500	温泉旅館新築 他	平安後期～溝・小穴・皿形積 平安後期～鎌倉～井戸・土坑・溝・小穴　近世～溝
㉟	東弓削	市教委 (91-373)	920304 ~920319	八尾木東1	8	公共下水道	古墳前期～土坑状遺構
㉟	中田	研究会 (NT92-13)	930128 ~930303	八尾木北5	123	引出し管路新 設	古墳前期～土坑・溝・落込み・小穴
㉟	東弓削	研究会 (NT92-6)	930219 ~930512	八尾木東2～3	100	公共下水道	弥生～古墳後期～河川 平安末～井戸・鎌倉～室町～遺物包含層
㉟	中田	研究会 (NT93-19)	931012 ~931201	八尾木北6～1	390	河川改修	古墳前段～上坑・溝・不明遺構 古墳前期後半～古墳
㉟	東弓削	市教委 (93-298)	940116 ~940117	八尾木東2～3	35.36	公共下水道	弥生中期後半～穿孔土器　古墳後期～埴輪 奈良末～平安初～瓦　鎌倉後半～溝
今後の調査地	東弓削	研究会 (HY94-7)	940420 ~940518	八尾木東1	48	公共下水道	弥生後期以前～河川 古墳前期～溝（土器の集積）　今回報告
㉟	東弓削	研究会 (HY94-8)	941003 ~941020	八尾木3	40	公共下水道	古墳以前～河川
㉟	東弓削	市教委 (94-484)	941202	八尾木4～90他	20.25	共同住宅建設	平安～寺院跡？
㉟	東弓削	研究会 (HY95-9)	960323 ~960328	東弓削1～2	70	公共下水道	中世～旧大和川（長瀬川）の流路　近世～溝

第2章 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市の公共下水道工事(平成5年度-24工区)に伴うもので、当調査研究会が東弓削遺跡内で実施した7度目の発掘調査(HY94-7)にある。調査区は発進立坑と到達立坑の2ヵ所で、東側の発進立坑を「1区」、西側の到達立坑を「2区」と呼んだ。調査地は八尾木東1丁目南部の住宅街の道路に位置しており、1区の現状は、南北道路に東西道路が取り付く三叉路にあたり、南北道路の東側には、水路を挟んで水田が広がっている。また、2区は1区から西80m地点の東西道路に位置しており、両側には民家が立ち並んでいる。調査は、東側の1区から開始し、1区の調査終了後、2区の調査を行った。両調査区とも、工事の進捗状況に合わせて随時調査を行い、工事による掘削が終了する時点まで立ち会った。調査期間は平成6年4月8日から5月18日まで、実働日数は13日間である。

1区は平成6年4月8日から掘削を開始し、4月21日に現地表下4.0mまでの掘削を終了した。1区の面積は約40.96m²である。2区は、平成6年5月13日から掘削を開始し、5月18日に現地表下4.4mまでの掘削を終了した。2区の面積は約7.2m²である。



第2図 調査区設定図 ($S = 1/1000$)

第3章 検出遺構と出土遺物の概要

第1節 1区の概要

1) 基本層序

現地表面のレベル高はT.P.+10.850m前後、盛土は約0.3m程度なされている。西側の道路部分には、ガス管や水道管理設時の搅乱が、深さ1m前後に及んでいる。

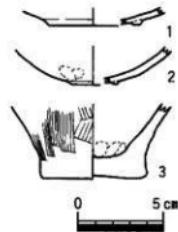
101層:旧耕土は、調査直前まで東部で耕作されていた土層で、現地表

下0.15~0.3mに存在する。上面の標高はT.P.+10.7m、層厚は0.2m前後である。

102層:青灰色砂質シルトは層厚0.2m前後で、101層の床を形成する。

103層:灰色微砂~粗砂は層厚0.5~0.6mを測り、含水量は多い。平安時代末期~鎌倉時代の土師器碗や瓦器碗など(第3図-1・2)が少量含まれる。

104層:黒灰色粘質シルトは弥生時代後期~古墳時代前期(布留式期)までの遺物包含層で、層厚は0.2~0.3mを測る。遺物の含有量は



第3図 103層(1・2)・105層(3)出土遺物実測図

きわめて多く、コンテナ箱(60×40×20cm)に7箱分出土した(第6図-4~第12図-167)。

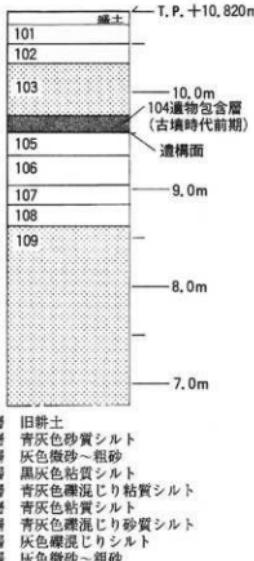
105層：青灰色礫混じり粘質シルトは古墳時代前期の遺構面を構成する土層で、層厚は0.1～0.2mを測る。上面のレベル高はT.P.+9.3～9.4m程度を指し、東から西へなだらかに下がっている。この下がった部分に遺物が落ち込んだ状態で多量に検出された。この105層内部からは、弥生時代中期の土器が検出されている（第3図-3）。

106層：青灰色粘質シルトは弥生時代の遺構面を構成する可能性のある土層であるが、明確にはできていない。層厚は0.3m前後、上面のレベル高は、T.P.+9.0m程度である。

107層：青灰色疊混じり砂質シルトの層厚は約0.2mである。

108層:灰色疊混じりシルトの層厚は0.2m前後である。

109層:灰色微砂～粗砂はきわめて水量の多い砂層で、厚さ1.7m以上を確認した。なお、109層の上部には、灰色礫混じり粘質シルト・灰色微砂混じり粘質シルトなどが部分的に堆積している。



第4図 1区東側壁面柱状図 ($S=1/50$)

2) 檢出遺構と出土遺物

105層上面では、南から北に伸びる流路状の落ち込みの一部を検出したものと思われる。落ち込みの肩は調査区東部にあり、105層上面は東から西へなだらかに下がっている。105層上面のレベル高は、東の肩を構成する調査区東部では、南端がT.P.+9.5m(現地表下1.3m)前後ともっとも高く、北端でT.P.+9.3~9.35m(現地表下1.5m)前後を指す。一方、落ち込んでいる調査区西部では、南でT.P.+9.25m(現地表下1.6m)、北でT.P.+9.15m(現地表下1.7m)前後を指し、東西の高低差は0.2~0.3m、南北の高低差は0.1~0.2m程度ある。

遺物はおもにこの落ち込み内部に堆積する104層から出土したが、弥生時代後期から布留式古相までのものが混在しており、層位からの分類是不可能であった。また、古い時代の形態を受け継いだものも含まれている可能性もあり、はなはだ不確かな部分があることは否めない。

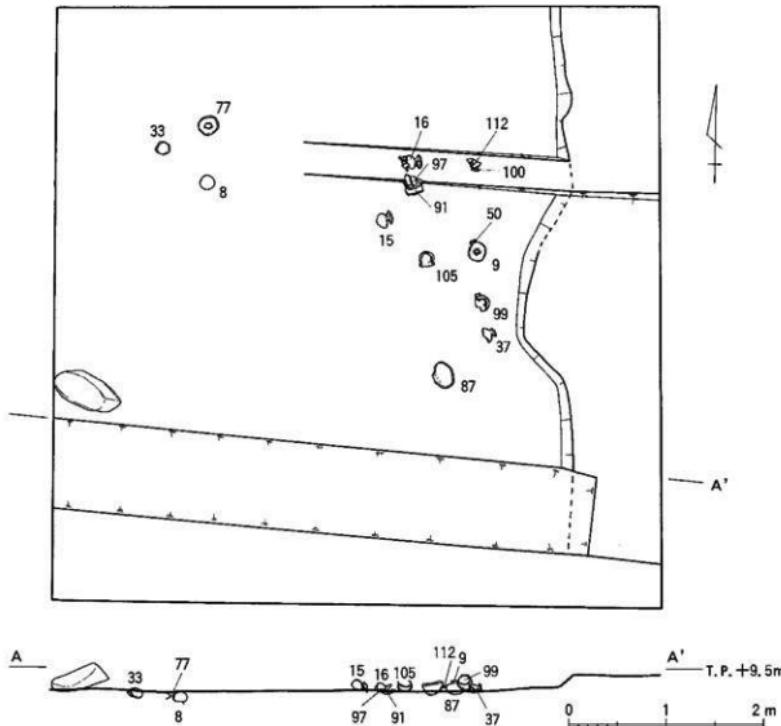
布留式古相の遺物には、直口壺・二重口縁壺・小型壺・小型器台・高杯・布留式壺・庄内系の壺・V様式系の甕などがあり、量はきわめて多い。なかでもとくに、小型の二重口縁壺をはじめとして、小型器台・小型高杯・小型鉢などの精製の器種が占める割合が高いようである。また、内部に漆が多量に付着した小型壺や、在地の土器以外に、他地方の土器も多く含まれている。その他に、一面が平滑な花崗岩も出土している。

土器類は、落ち込みの肩に沿った幅2mほどの範囲に密集しており、そのうち出土状況の明らかなものは、二重口縁壺(9)・小型二重口縁壺(15・16)・小型器台(37)・小型高杯(50)・壺(87・91)・壺(97・99・100・105・112)の12点である。そこから2mほど西側では、直口壺(3)・小型

器台(33)・広口壺(77)の3点がまとまって位置しており、そこから南西3m付近の調査区東端には、花崗岩が位置していた(図版十)。

小型二重口縁壺(15・16)は口縁部を東に、壺(105)は口縁部を南に、小型器台(37)は口縁部を南西に、壺(87)は底部を南西に向け、それぞれ横向きの状態で検出された。二重口縁壺(9)は正立しており、体部の下には小型高杯の裾部(50)があった。壺(99)も正立していた。壺2点(100・112)と壺(91)・壺(97)とは破片の状態で2ヶ所にまとまっていた。小型器台(33)・広口壺(77)は正立しており、直口壺(8)は口縁部を下に向かて倒立していた(第5図)。

このうち、直口壺(8)・壺(105)に穿孔が見られ、直口壺(8)の口縁部、小型器台(33・37)の裾部は打ち欠かれた可能性がある。二重口縁壺(9)・小型二重口縁壺(15・16)・壺(99・105)が完形に近い資料である。



第5図 落ち込み遺物出土状況平面面図 ($S = 1/50$)

小型・精製の器種(第6図-第8図)

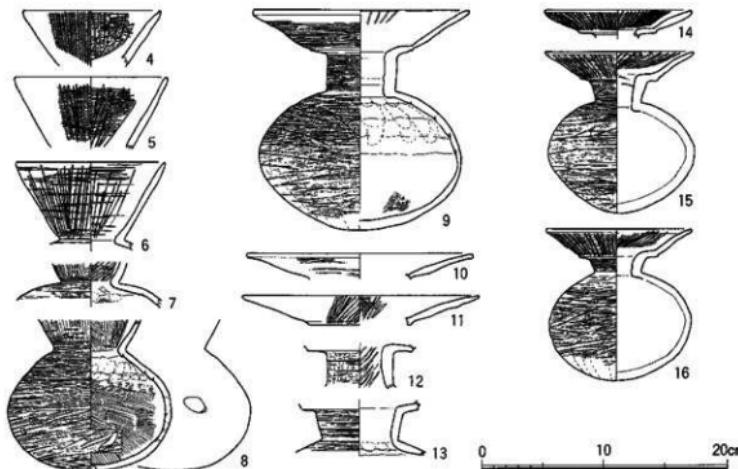
直口壺(4~8)、二重口縁壺(9~13)、小型二重口縁壺(15~16)、小型壺(17~31)、小型器台(32~40)、小型高杯(41~50)、高杯(51~64)がある。いずれも横方向の細かいヘラミガキ調整で仕上げるもので、橙色~明るい褐色を呈する精製の器種である。このうち、落込みの底部で検出されたものは、直口壺(8)・二重口縁壺(9)・小型二重口縁壺(15~16)・小型器台(33~37)・小型高杯(50)である。小型高杯のだけが裾部のみの破片であったが、いずれも遺存状態は良い。

直口壺(4~8)

いずれも内外に細かいヘラミガキを施し、最終的な仕上げとしてヘラミガキを放射状に施している。(4)の口径は10.9cmとやや小型、(5~6)は12cmほどの中型品である。頸部のみの(7)はやや内湾するもので、東海地方の影響をうけている。直口壺体部(8)の外側調整は(4~7)と同様であるが、内面調整はハケによる。この壺は落ち込みの底で検出されたものであるが、体部中位からやや下にかけて、焼成後に打ち欠いたと思われる孔が3個ある。また底部の中央には、錐穴状の小孔が穿たれている。口縁部は途中で欠損しているが、故意に打ち欠いた可能性がある。

二重口縁壺(9~16)

二重口縁壺には大型・小型の二種があり、大型は口径17~19cm、小型は口径12cm前後である。いずれも丁寧なつくりで、大型の(9~11)では口縁部内面のみに、小型の(14~16)では口縁部内外面に放射状ヘラミガキか暗文状に施されている。このうち、(9~15・16)が落ち込みの底で検出された。ほぼ完存する資料で、(9)は偏平な球形の体部に直立する頸部がつくもので、(15)は尖りぎみの底部をもつ偏平な倒卵形の体部から開いて立ち上がる頸部に至り、(16)は球形にちかい体部から短く開く頸部に至るものである。

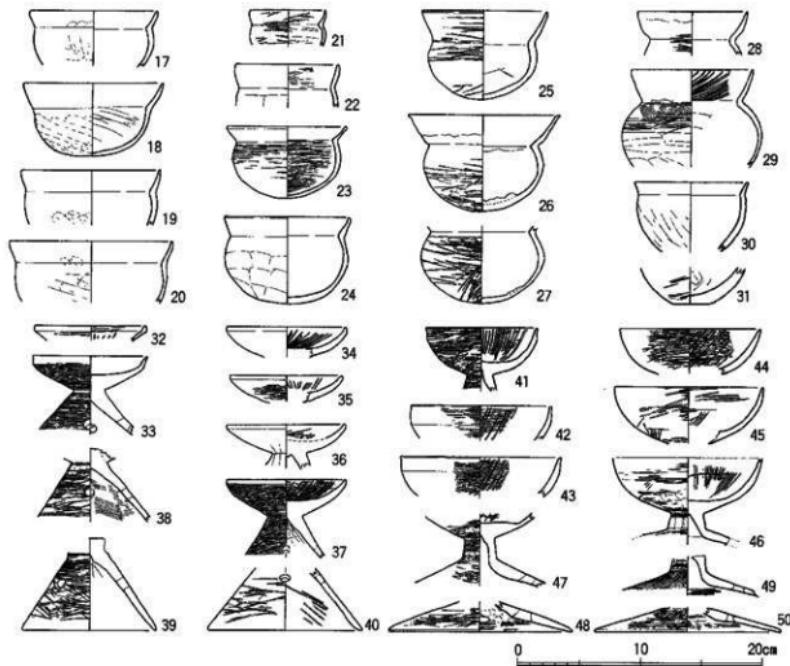


第6図 104層出土遺物実測図-1 (4~16)

小型壺(17~31)

小型壺には、次の①~④の形態が見られる。いずれも形態・大きさはふぞろいで、口径は最小のものが(21)の6.1cm、最大のものは(20)で13.2cmである。体部下半のみの(31)は、ヘラケズリによる小さな平底をもち、器肉も厚い。このうち、(25~27)の内面には、漆が付着しており、漆の容器であった可能性が高い。

- ①体部が浅く、鉢形、にちかいもの(17~20)
 - ②口縁部が体部に比して短く、椀形、にちかいもの(23・24・30)
 - ③口縁部が体部に比して長く、口径が腹径より大きいもの(25~28)
 - ④口径が腹径より小さいもの(29)
- ①は頸部がしまらないために、体部は半球形を呈している。口縁部は内湾して長く伸びる。口径は10.3~13.2cmである。②は頸部でややしまるために、体部は深みをもつ。口縁部には内湾するもの(21・22)と直線的なもの(23・24)があるが、いずれも短く、体部の1/3以下の長さである。①に比べてやや丁寧なつくりである。口径は6.1~10.1cmである。③は頸部がくびれ、体部は球



第7図 104層出土遺物実測図-2 (17~50)

形にちかづく。口縁部は内湾して大きく開き、体部の1/2程度の長さをもつ。外面にはきわめて丁寧なヘラミガキが施されている。口径は8.9~12.5cmである。④は頸部が強くしまるため、体部は球形となる。体部に比して口縁部は短い。内面口縁部には放射状のヘラミガキが見られるが、下半にはヘラケズリの痕跡が残る。口径は9.8cmである。

小型器台(32~40)

小型器台の受け部には、次の①~③の形態が見られる。脚部はすべて円錐形である。このうち、落ち込みの底部で検出されたものは(33・37)で、ともに裾端のみが欠損している。

①皿型の受け部にわずかにつまんで口縁端部をつくるもの(32)

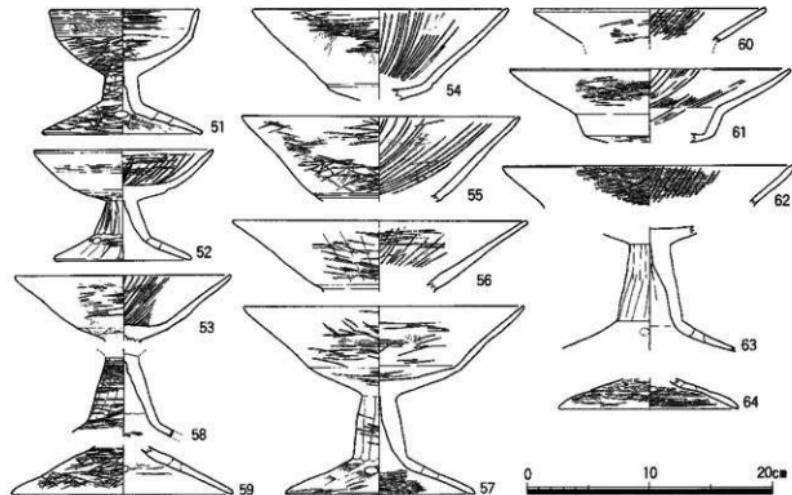
②皿型の受け部に外反ぎみの口縁部が取り付くもの(33)

③浅い半球形の受け部をもつもの(34~37)

遺存状態の良い(33・37~39)では、外面および受け部内面が丁寧なヘラミガキで調整されていることがわかる。(36)以外の受け部の内面には、放射状ヘラミガキが施されている。

小型高杯(41~50)

小型高杯は椀形の杯部に短い柱状部と低い裾部からなるもので、口径は(41)の9cmを除いて12cm前後と揃っている。口縁端部がわずかに外反ぎみとなる(41~43)と口縁端部まで丸いカーブで伸びる(44~46)の2タイプがある。小型器台同様、外面および杯部内面は丁寧なヘラミガキで調整されている。(45)以外の杯部の内面に、放射状ヘラミガキが施されている。(50)は落ち込みの底、二重口縁巻(9)の下で検出された。



第8図 104層出土遺物実測図-3 (51~64)

高杯(51~64)

高杯のうち(51)は小型で楕形の杯底体部に直立する口縁部がつくもので、吉備地方の影響を受けたものか、口縁部の外側面には横方向のハケ目が施されている。

(52)は浅い楕形の杯部を呈するものである。

(53~57)は水平な杯底部から大きく開く口縁部に至るもので、杯底部と体部の境界には鈍い段が認められる。(60~62)は深みのある杯底部から外折して口縁部に至るものである。いずれも丁寧なヘラミガキがなされており、(51~56・58~62)の内面の口縁部には、放射状のヘラミガキが施されている。

脚部には、柱状部から裾部へとゆるやかなカーブで続くもの(52・57・58・59)と、柱状部と裾部の境が明確に屈曲するもの(63・64)の2種があるが、前者が(53~56)に、後者が(60~62)に伴うものと考えられる。

大型・粗製の器種（第9図）

弥生時代後期から見られる器種で、弥生時代後期のものも含んでいる。器種には、直口壺(65~68)、他地方の壺(69~73)、大型鉢(74)、弥生時代後期の壺(75・76)、広口壺(77~82)、壺体部～底部(83~91)がある。このうち、落ち込みの底部から検出されたものは、広口壺口縁部～肩部(77)と壺体部～底部(87・91)である。

直口壺(65~68)

(65~68)は大型の直口壺、または短頸壺である。弥生時代後期末～庄内期からみられる器種で、ヘラミガキは見られず、ハケ・ナデ調整である。口径は(65)の13.0cmから(66)の14.7cmまであり、大きさはそろっている。

他地方の壺・鉢(69~74)

(69・70)は山陰地方の特徴を持つ複合口縁壺で、ともに白灰色の色調を呈する。口径は、(69)が15.5cm、(70)が18.4cmと大きさに差はあるが、ほとんど相似形である。大型鉢(71)も山陰地方の特徴をもつ複合口縁の鉢である。

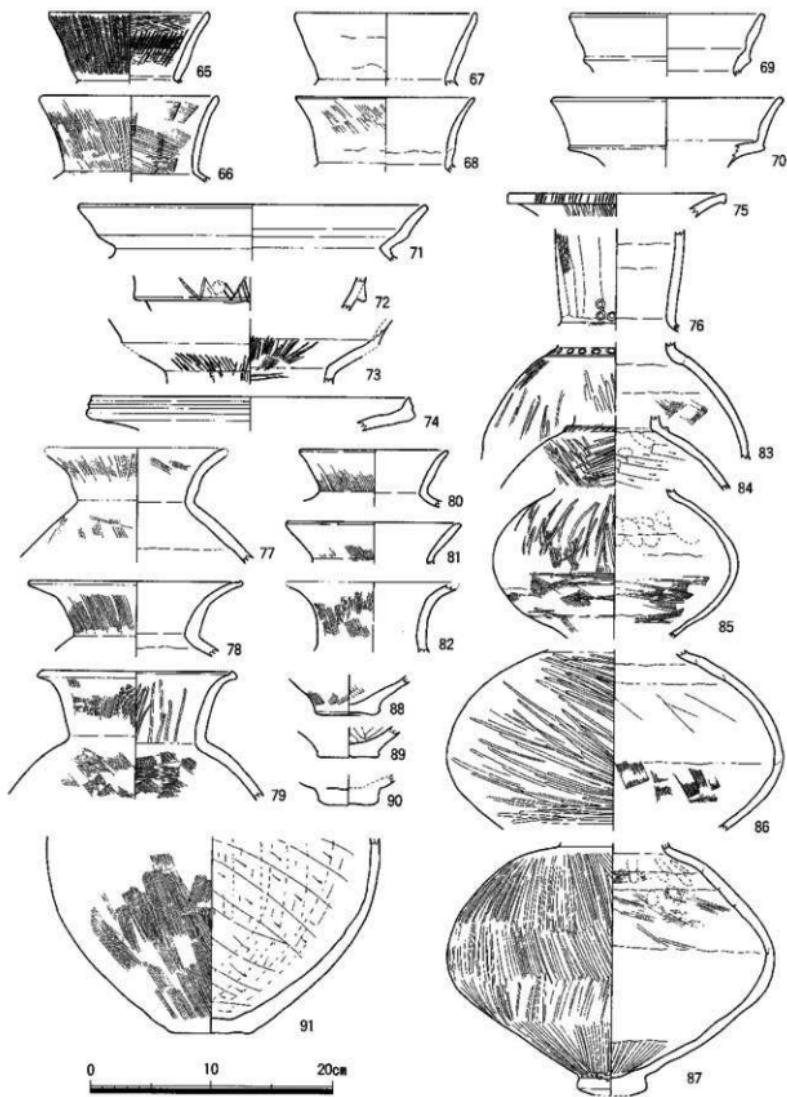
(72~74)は吉備地方のもので、弥生時代後期末～庄内期からみられる器種である。(72)は広口壺または器台で、口縁端部を拡張して、外側面にヘラ描きの鋸歯文と貼り付けの円形浮文で飾るが、本例では、円形浮文のはがれた痕が見られる。(73)は複合口縁壺で、両面が粗いハケで調整されている。(74)は口縁端部に2条の凹線めぐらせてている。

広口壺・長頸壺(75~82)

広口壺(75)は口縁部外側面にヘラ先による刻み目文が施されている。

長頸壺(76)の頸基部には、竹管押圧文がある。

広口壺(77~82)はおもにハケ調整で仕上げられており、弥生時代後期からみられる器種である。(77)は器表面が著しく風化しており、口縁端部は摩耗している。この壺は、落ち込みの底部で検出されたもので、その出土状況から、口縁端部および体部下半は故意に打ち割られている可能性もある。(78・79)の口縁端部は上方へ拡張されている。(79)の内面の口頭部には、ヘラミガキが施されている。(80・81)は小型・薄手の壺であるが、体部へは水平ちかくに屈曲しているため、体部の張りは強いものとなるであろう。(82)は直立する口頭部のみの破片で、(77)同様器表面の風化が著しい。



第9図 104層出土遺物実測図一4 (65~91)

壺体部～底部(83～91)

(83・84)は、ともに頸部と体部の境に装飾が施されるもので、(83)には2条の沈線間に竹管押压文がスタンプされ、(84)にはヘラ先による刻み目をもつ凸帯が貼り付けられている。

体部の器形は、(83・91)は球形を呈すると考えられ、(84～86)が偏平な球形、(87)は中位で著しく張るソロバン玉形を呈している。(87)の底部は、体部から突出するもので、側縁から裏面にかけてヘラケズリがなされている。また、(88～90)の底部も体部から突出するもので、(87)同様のヘラケズリが認められる。(91)は体部から突出しない平底をもち、外面調整はハケで、底部側縁～底部裏面および内面はヘラケズリによる。

このうち、落ち込みの底部から出土したものは(87)と(91)であるが、(87)は単独で、(91)は壺(97)とともに破片の状態で検出土された。

壺(第10図・第11図)

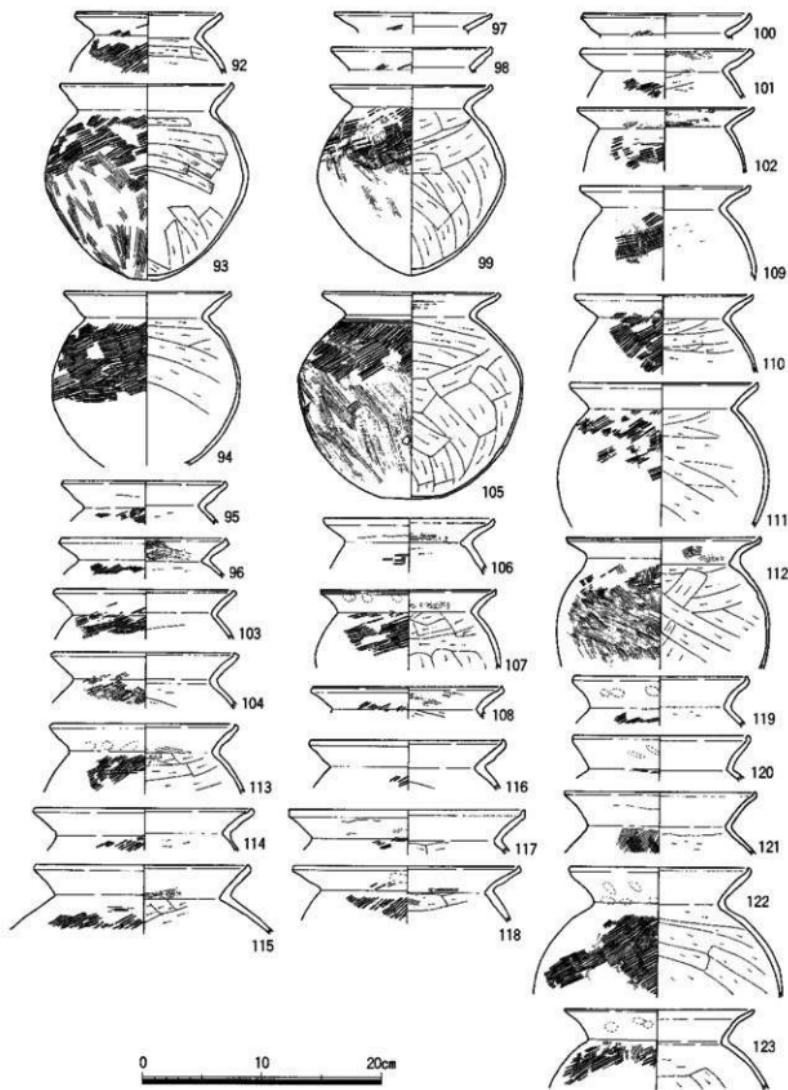
壺には、庄内系の壺(92～123)、ハケ調整の壺(124～131)、布留式壺(132～135)、V様式系の壺(136～148)、他地方の壺(149～155)がある。このうち、落ち込みの底部から検出土されたものはすべて庄内系の壺(97・99・100・105・112)で、(99・105)はほぼ完存、(112)は口縁部から体部中位まで、(97・100)は口縁部のみの小破片である。

庄内系の壺(92～123)

外面に細筋タタキの後放射状のハケ、内面にヘラケズリを有するいわゆる「庄内壺」である。大きさには小型・中型・大型の3種があり、体部の形態には倒卵形のものと球形に近いものの2種がある。

①小型の壺(92～102)：小型壺の口径は、小さいものは11.7cm(97)・11.9cm(92)と12cm未満、最大のものは(102)の14.4cmで、平均すれば13～14cmのものが多い。体部の形態は、完形品に近い(93・94・99)を見れば、おおむね倒卵形を呈していることがわかるが、これらは胸部最大径の位置が中位にあり、球形にちかく傾向にある。逆に(102)は、胸部最大径が口径を下回り、張りの弱い体部となっている。口縁部の形態は、(92～99)が「く」の字形に屈曲・外反するもので、(100～102)が内湾ぎみに伸びるものである。前者の口縁端部には、つまみあげて外傾する面をもつもの(92～96)、直立する面をもつもの(97・98)、端部ちかくで器肉を減じて丸みをもって立ち上がるものの(99)の3種がみられる。後者の口縁端部は、わずかにつまみあげられ、外傾する丸みのある面を有する。このうち、(97)は壺(91)とともに、(100)は中型の壺(112)とともに破片の状態でまとめて出土した。

②中型の壺(103～112)：中型壺の口径は、最小が13.8cm(109)、最大が15.8cm(112)で、平均すれば15cm前後である。この中で、比較的遺存状態の良いもの(105・111・112)は、張りの強い球形にちかい体部を呈しており、他の壺もおおむね同様の器形になるものと思われる。口縁部の形態には、「く」の字形に屈曲・外反するもの(103～108)と、口縁部上方で内湾ぎみとなるもの(109～112)の2種がある。口縁端部のつまみあげは、(103・104)が鈍く、(105)は鋭い。(106～108)の口縁部は上方へ拡張ぎみとなり、強いヨコナデによって、(106)の口縁部外側面は凹面を呈し、(107・108)の口縁部外側面には凹線状の窪みが一周する。一方、内湾ぎみの口縁部をもつ(109～112)の口縁端部は、巻き込むように丸く終わっている。このうち、(105・112)が落ち込みの底から出土したもので、(105)の腹部と底部には焼成後に小孔が穿たれている。



第10図 104層出土遺物実測図一5 (92~123)

③大型の壺(113～123)：大型壺の口径は、最小が14.6cm(119)、最大が19.4cm(117)でバラツキがある。このうち、(113～118)は、「く」の字形に鋸く屈曲・外反する口縁部をもつもので、典型的な「庄内壺」の形態を有している。口縁端部のつまみあげには、鈍いもの(113～115)と鋭いもの(116～118)があり、後者は外傾する面をもっている。これらの口径は17.6～19.4cmとかなり大きくなっている。一方、(119～122)の口縁部は長く外反して伸びた後、端部ちかくで内湾ぎみとなり、端部は丸くおさめられている。体部中位まで遺存している(122)を見れば、球形に近い体部をもつものと思われ、頸部が強くしまるために、口径も15.8cmと小さいことがわかる。口縁部のみの破片(119～121)も(122)と同様の形態を呈していることから、球形の体部をもつものと考えられ、口径に比し、胴部最大径は大きくなるものと考えられる。(123)は、口縁端部が尖って終わるために異質であるが、それを除けば(122)に似る。

ハケ調整の壺(124～131)

外面の調整がおもに継方向のハケによるものをまとめた。(124)のみ口径12.3cmとやや小型であるが、他の壺(125～131)は14.5～16.5cmの通有の大きさである。(124・125)の口縁部は若干内湾気味に伸び、端部は巻き込まれるようにおさめるため、「庄内壺」とは明らかに異なるが、(126～131)では、「庄内壺」の形態とあまり違いないことがわかる。外面の調整は、(124)のみ横方向、(125～131)が継方向のハケ調整である。

布留式壺(132～135)

体部から丸みをもって屈曲し、内湾する口縁部をもつ。外面の調整はおもに横方向のハケによる。(132～134)が口径13.9～15.9cmの通有の大きさで、(135)が口径19.6cmの大型の器種である。口縁端部は、(132)が内外に肥厚し、水平な上端面をもつ。(133)は内に丸くおさめ、(134)では内に小さくつまれ、外傾する丸みのある面をもつ。(135)は上外方に肥厚し、内傾する広い面がつくられる。

V様式系の壺(136～148)

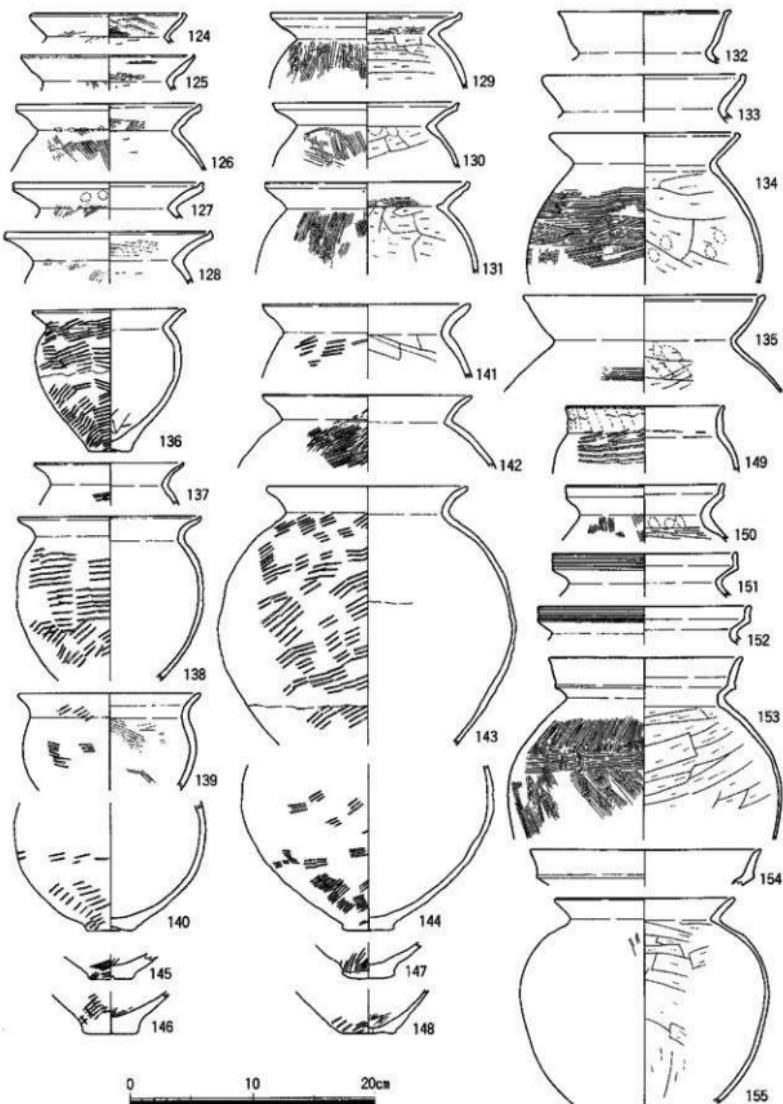
外面に太筋タタキ、内面調整はナデによる弥生時代後期以来の壺である。弥生時代のものが含まれている可能性は高いが、(140・142～144)のように張りの強い球形の胴部から単純に折り返されるだけの口縁部、わずかに突出する小さい底部をもつものは、新しい要素を持っている。この壺にも、大・中・小の3種がある。

①小型壺(136・137)：口径は12cmほどである。(136)の底部は、体部から突出しない上げ底状を呈している。体部中位の接合痕が顯著で、そこを境にタタキ目の方向が代わっている。内面底部にハケ目が見られる。(137)の口縁部は、若干内湾ぎみに伸びている。

②中型壺(138～140)：口径は15cm未満である。(138・140)でも体部中位の接合痕を境として、タタキ目の方向がかわっているのが認められる。(140)の底部は、体部から突出し、中央が窪むドーナツ状である。

③大型壺(141～144)：口径は16cm以上である。(143)では体部中位の上方と下方の2か所に粘土帯の接合痕が見られ、そこを境にタタキ目の方向がかかる。他の壺(141・142・144)は体部上方の接合部から欠損しており、(144)には下方の接合痕が残っている。(144)の底部は、球形の体部から突出する平底をもち、体部に比して小さい。

④底部(145～148)：壺の底部(145～147)は、いずれも体部から突出する平底で、大型の壺のも



第11図 104層出土遺物実測図一6 (124~155)

のである。このうち(147)のみに底部側縁から底部裏面にかけてヘラケズリがおこなわれている。(148)は有孔土器の底部で、体部から突出しない平底の中央に、孔が穿たれている。

他地方の甕(149~155)

(149)は口縁部を叩き出してつくるもので、端部にはヘラ先による刻目文が施されている。橙色系を呈した軟質の胎土が用いられており、器表面の風化が進んでいる。

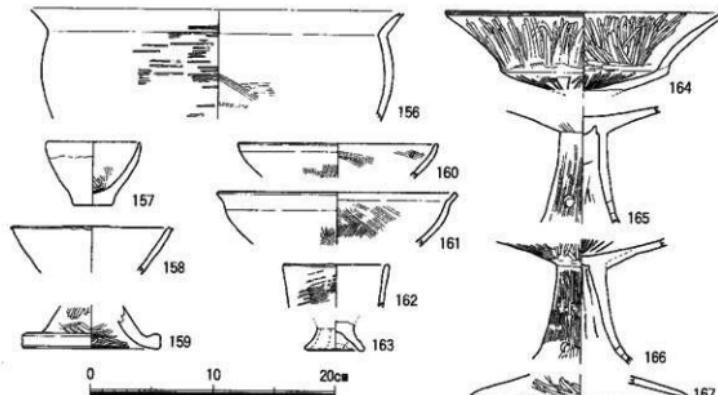
(150~152)は口縁部を上方に拡張させ、その外側縁に櫛描きの直線文が施される吉備地方の特徴をもつ甕である。口径には、12.8cm(150)、15.0cm(151)、17.3cm(152)の大・中・小がある。

(153・154)は口縁部を上向外方に拡張させる山陰地方の甕である。灰黄色系の色調を呈する。口径は(153)が15.6cm、(154)が18.6cmで、ともに大型に属する。(154)の外面体部には、縦ハケの後中位に横方向のハケが一単位分施されている。

(155)は、上方に最大径をもつ体部から、「く」の字型に屈曲する短い口縁部に至るもので、体部外面の調整はナデ、上方にヘラミガキがわずかに見られる。内面の調整はヘラケズリである。東部瀬戸内地方で古墳時代前期(布留式期)に見られる甕に似る。口径14.6cmの中型の甕である。

その他の器種(第12図)

大型鉢(156)はV様式系の太筋タタキをもち、口縁部はタタキ出して作り出されている。胎土は橙色系で、他地方の甕(149)に似る。(157・158)はV様式の小型鉢で手づくね成形で作られている。(158)の口縁部は未調整のまま終わっている。鉢(160・161)はともにハケ調整で仕上げられており、庄内期からみられる器形である。前者は直口、後者には外反する短い口縁部が付く。高杯(164~167)はV様式のもので、粗目のヘラミガキで調整され、杯部と脚部との接合は、円板充填による。(159)は小型の脚台部で、高杯・鉢・甕いずれのものかはわからない。ヘラミガキで丁寧に仕上げられている。(162・163)は製塩土器で、ともに損傷が激しい。



第12図 104層出土遺物実測図-7 (156~167)

石(図版十)

石は調査区南部の西端で検出された。長さ約50cm・幅約30cm・厚さ約25cmを測る花崗岩で、一面は平滑、裏面は突出する「L」字形を呈している。この石は長軸を東西に向け、平滑面を上に、突出部を下にして置かれていた。上面は東上がりとなっている。上面やベースの周囲には炭や灰が遺存していた。

第2節 2区の概要

1) 基本層序

2区の現地表面のレベル高はT.P.+11.0m前後で、1区よりやや高い。盛土は0.5m前後であるが、1区と同様に、水道管やガス管埋設に伴う搅乱が1mに及ぶ部分もある。

201層:旧耕土の層厚は0.15~0.2m前後である。

202層:青灰色粘質シルトは層厚0.2~0.25m、若干の砂粒を含み、下部に酸化鉄を含んでいる。

203層:暗灰色粘質シルトは層厚0.3m前後を測り、礫および植物遺体を含んでいる。

204層:灰色粗砂は層厚0.1~0.15mを測る。平安時代の土師器壺・小皿・須恵器杯などが少量出土した(第14図-168~170)。

205層:淡青灰色粘質シルトは層厚0.15~0.2mを測る。上面には足跡状遺構の窪みがあり、水田耕土の可能性がある。この層上面はT.P.+9.5~9.6m、現地表下1.4m前後である。

206層:黒灰色粘質シルトは古墳時代前期(布留式古相)の遺物包含層で、1区-104層に対応する土層である。層厚は0.1~0.15m、1区同様遺物量が多い(第15図-173~180)。

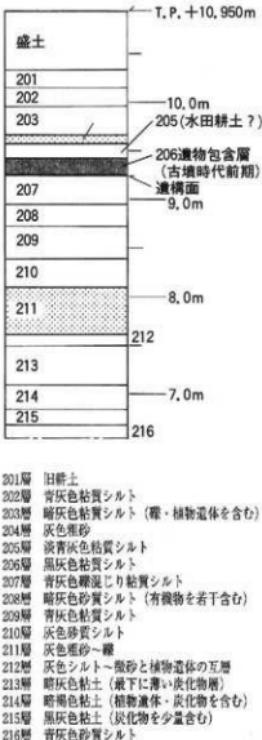
207層:青灰色礫混じり粘質シルトは上面が古墳時代前期の遺構ベースとなる層で、1区-105層に対応する。層厚は0.3m前後で、上面のレベル高はT.P.+9.2~9.25mを指し、1区より0.1~0.2m低い。この層からも弥生時代中期~後期の土器が若干出土している(第14図-171~172)。

208層:暗灰色砂質シルトは層厚約0.2m、有機物を含むやや汚れた層である。

209層:青灰色粘質シルトは層厚0.3~0.4m、1区-106層に対応するものと考えられ、弥生時代の遺構ベースの可能性がある。上面のレベル高はT.P.+8.75m程度を指し、1区より0.5~0.6m低い。

210層:灰色砂質シルトは層厚0.3m前後、水を少量含む。

211層:灰色粗砂~礫は層厚0.4~0.5mを測る。1区-109に



第13図 2区東側壁面柱状図(S=1/50)

対応する河川流出土である。

212層：灰色シルト～微砂と植物遺体の互層は層厚0.05～0.1mで薄く堆積する。

213層：暗灰色粘土の層厚は0.4m前後と厚く、最下に薄い炭化物層が堆積する。

214層：暗褐色粘土は層厚0.2m前後で、植物遺体や炭化物などを含んでいる。

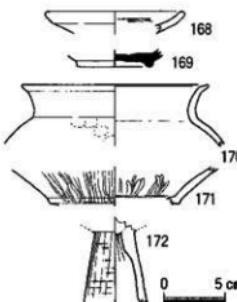
215層：黒灰色粘土は層厚0.2m前後で、粘性が高く、炭化物を少量含んでいる。

216層：青灰色砂質シルトは層厚0.1m以上を確認した。多量の水を含んでいる。

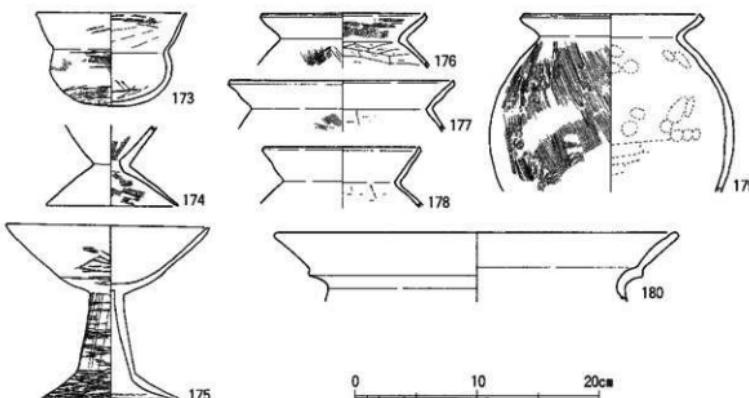
2) 検出遺構と出土遺物

遺構は認められなかったが、206層から古墳時代前期(庄内新段階)の遺物がまとまって出土した。量はコンテナ箱(60×40×20cm)1箱である。

器種には小型壺(173)・小型器台(174)・高杯(175)・庄内壺(176)・V様式系の壺・布留傾向の壺(177)・布留式壺(178)・東四国(阿波)地方の壺(179)・山陰地方の鉢(180)などがあり、1区と同様小型精製器種の占める割合が高いようである。ここでも、遺構ベースである207層から、弥生時代中期の壺、同後期の高杯(171・172)などが出土しており、1区同様、弥生時代の遺構面の存在を示唆している。また、上層の204層からは平安時代中期以降の土師器壺・小皿や須恵器杯(第14図-168～170)などが出土しており、205層(水田耕土)の埋没時期が明らかにできた。



第14図 204層(168～170)
207層(171・172)
出土遺物実測図



第15図 206層出土遺物実測図

第3節 出土遺物観察表

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調査	内面調整	その他の
1	瓦器輪 高台部	高台径 高台高 5.3 0.3	灰褐色	密	良好	不明	不明	1区103層出土
2	瓦器輪 高台部	高台径 高台高 2.5 0.2	墨灰色	密	良好	ナデ	ナデ	1区103層出土
3	壺 底部	底 径 5.9	灰褐色 (焦色)	やや粗	良好	底ハケ後底面～周縁ナデ	指押さえナデ	1区105層出土 弥生II様式
4	直口壺 口縁部	口 径 10.9	茶褐色	やや粗	良好	ナデ後ヘラミガキ(密)、最終的に放射状ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ	ナデ後ヘラミガキ(密)、壁ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ	
5	直口壺 口縁部	口 径 12.2	淡褐色	密	良好	ナ	ナ	
6	直口壺 口縁部	口 径 12.0	淡赤褐色	密	良好	ナ	ナ	
7	直口壺 頭部～体部	—	淡褐色	密	良好	ナ	粘土帶接合部指押さえ後ハケ	
8	直口壺 頭部～底部	最大径 13.2	明褐色	密	良好	体部下半ケズリ後ナデ・ヘラミガキ(密)	粘土帶接合部指押さえ後ナデ、口縁部・体部にハケ	腹部に3孔・底部に1孔を有する
9	一重口縁壺 口縁部	口 径 17.5 器 高 18.1 最大径 16.4	明褐色	密	良好	ナ	粘土帶接合部指押さえ・ハケ、口縁部ヨコナデ、放射状ヘラミガキ	
10	二重口縁壺 口縁部	口 径 18.3	明褐色～ 灰褐色	やや粗	良好	ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ(密)	ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ(密)	
11	二重口縁壺 口縁部	口 径 19.1	淡褐色	密	良好	ヨコナデ・ナデ・ハケ後放射状ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ・ハケ後放射状ヘラミガキ	
12	二重口縁壺 頭部	—	淡褐色	密	良好	ハラによる面取り、ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	
13	二重口縁壺 頭部	—	明褐色	密	良好	ナデ後ヘラミガキ	指押さえ・ヨコナデ	
14	小型 二重口縁壺 口縁部	口 径 11.8	淡褐色	密	良好	ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ(密)、最終的に放射状ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ(密)、最終的に放射状ヘラミガキ	
15	小型 二重口縁壺 完全	口 径 12.1 最大径 12.2 器 高 13.2	明褐色	密	良好	体部下半ケズリ後全体をナデ・ヘラミガキ(密)、口縁部放射状ヘラミガキ	類似ハケ・ナデ後ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ後放射状ヘラミガキ	
16	小型 二重口縁壺 完全	口 径 11.7 最大径 11.8 器 高 12.4	明褐色	密	良好	ナ	ナ	
17	小型壺 口縁～体部	口 径 10.3	にぶい褐色 (明褐色)	密	良好	指押さえナデ・ヘラケズリ後体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	
18	小型壺 口縁～底部	口 径 11.4 器 高 5.9	明褐色	密	良	ナ	ナ	
19	小型壺 口縁～体部	口 径 11.2	淡褐色	密	良好	ナ	ナ	
20	小型壺 口縁～体部	口 径 13.2	淡褐色	やや粗	良好	ナ	ナ	

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	その他
21	小型壺 口縁～体部	口径 6.1	淡褐色	やや粗	良好	ハケ・ナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ	ハケ・ナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ	
22	小型壺 口縁～体部	口径 8.3	墨褐色 (明褐色)	やや粗	良好	ヘラケズリ後ナデ・ヨコナデ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ハケ	
23	小型壺 口縁～底部	口径 9.6 高さ 5.9	密	良好	体部ヘラケズリ後ハケ・ナデ・ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ	体部ナデ・ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ		
24	小型壺 口縁～底部	口径 10.1 高さ 7.1	淡褐色	密～やや粗	良好	体部ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ(粗)、口縁部ヨコナデ	底部指ナデ・ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ	
25	小型壺 口縁～底部	口径 10.1 高さ 7.1	淡橙褐色	密	良好	体部ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ(粗)、口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	内面に擦付着
26	小型壺 口縁～底部	口径 12.5 高さ 7.9	淡橙褐色	密	良好	＊	＊	内面に擦付着
27	小型壺 体部	最大径 10.0	淡茶～淡褐色	密	良好	体部下半ヘラケズリ後ナデ・上半ハケ後ヘラミガキ(密)	体部ナデ	内面に擦付着
28	小型壺 口縁～体部	口径 8.9	明褐色	やや粗	良	体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	
29	小型壺 口縁～体部	口径 9.8 最大径 11.4	明褐色	やや粗	良好	体部ヘラケズリ後ナデ・ハケ・ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ナデ後放射状ヘラミガキ	
30	小型壺 口縁～体部	口径 9.1	明褐色～淡褐色	密～やや粗	良好	体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	
31	小型壺 底部	底 径 3.0	淡褐色 (灰色)	やや粗	良好	体部～底面ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ(粗)	体部ヘラケズリ	
32	小型器台 口縁部	口径 9.0	明褐色	密	良	ヨコナデ後ヘラミガキ	ナデ・ヨコナデ後受部放射状ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	
33	小型器台 口縁～把部	口径 9.3	淡褐色	密～やや粗	良好	ナデ後ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ	＊	4孔
34	小型器台 受部	口径 9.6	明褐色	密	良好	ナデ・ヨコナデ	＊	
35	小型器台 受部	口径 9.0	淡褐色	やや粗	良好	ヘラケズリ・ナデ後ヘラミガキ(密)、口縁部ヨコナデ	＊	
36	小型器台 受部	口径 9.7	にぶい褐色	密	良好	ヘラによる面取り	ナデ後ヘラミガキの痕跡、口縁部ヨコナデ	
37	小型器台 口縁～端部	口径 9.6	明褐色	密	良好	ヘラによる面取り後ヘラミガキ(密)口縁部ヨコナデ	端部ナデ・受部ヘラミガキ(密)後放射状ヘラミガキ	1孔残存
38	小型器台 把部	—	淡褐色	密～やや粗	良好	ヘラによる面取り後ナデ・ヘラミガキ(密)	ハケ、ナデ	4孔
39	小型器台 把部	底 径 10.9	明褐色	やや粗	良好	外面ナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ(密)、端部ヨコナデ	シボリ目・ナデ、端部ヨコナデ	3孔？(2孔残存)
40	小型器台 新部	底 径 12.5	明褐色～淡褐色	密	良好	＊	ヘラケズリ・ナデ、端部ヨコナデ	1孔残存

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調査	内面調整	その他
41 五	小型高杯 杯~脚部	口径 9.0	淡褐色	密	良好	下半部による面取り、ハラケズリ、ナデ後ハラミガキ(密)	ナデ・ヨコナデ後ハラミガキ(密)、最終的に放射状へラミガキ	
42	楕形高杯 杯口縁部	口径 11.3	淡褐色 (褐褐色)	密	良好	ナデ・ヨコナデ後ハラミガキ(密)	+	
43	楕形高杯 杯口縁部	口径 13.1	明褐色	密	良好	+	+	
44	高杯 杯部	口径 11.5	明褐色	密	良好	杯底部ハラケズリ後ナデ・ヨコナデ後ハラミガキ(密)	+	
45	高杯 杯部	口径 11.9	明褐色	密	良好	+	ナデ・ハラミガキ(粗)	
46 五	高杯 杯~脚部	LJ 径 12.4	茶褐色~淡褐色	密	良好	+	杯部ナデ後放射状へラミガキ、柱状部ナデ	1孔残存
47 五	高杯 杯底~脚部	-	明褐色	密	良好	+	杯部ナデ後放射状へラミガキ、柱状部ナデ、箱部ヨコナデ	3孔?(2孔残存)
48	高杯 杯部	口径 14.6	明橙茶~ 明橙色	やや粗	良好	ナデ後ハラミガキ(密)	指揮さえ・ハケ、端部ヨコナデ	4孔?(2孔残存)
49 五	高杯 柱状~脚部	-	明橙茶色 (淡灰褐色)	やや粗	良好	柱状部ヘラによる面取り後 横へラミガキ(粗)、瓶部放射 状へラミガキ(密)	柱状部ナデ、瓶部ハケ	4孔?(2孔残存)
50	高杯 杯部	口径 15.2	明褐色	密	良好	ハケ後ハラミガキ、端部ヨコナデ	ハケ、端部ヨコナデ	4孔?(2孔残存)
51 五	高杯 ほぼ完存	LJ 径 11.9 器高 器径 10.3 12.7	暗灰褐色~ 黒色	密	良好	杯底部~脚部ヘラケズリ後 ハラミガキ、口縁部ヨコナ デ後横ハケ	ハラミガキ(密)、脚部状部 絞り後ナデ、瓶部ハケ	4孔?(2孔残存) 外間に墨付有
52	高杯 ほぼ完存	口径 14.4 器高 器径 9.0 10.8	灰白~淡 灰色	密	良好	杯底部~脚部ヘラケズリ後 ナデ、口縁部ヨコナデ	横へラミガキ後放射状へラ ミガキ、脚柱状部絞り後瓶 部ナデ	3孔(2孔残存)
53	高杯 杯部	LJ 径 17.5	灰白橙色	やや粗	良好	杯底部ヘラケズリ、体部ハ ケ後ハラミガキ(密)	ヨコナデ・ハケ後放射状へ ラミガキ	
54	高杯 杯部	口径 20.6	灰白~淡 橙褐色	やや粗	良好	+	+	黒斑点
55	高杯 杯部	LJ 径 22.5	淡橙褐色	やや粗	良好	ハケ・ヨコナデ後ハラミガ キ	ハケ・ヨコナデ後放射状へ ラミガキ	
56	高杯 杯部	口径 23.8	淡赤橙~ 茶褐色 (淡橙色)	やや粗	良	+	+	
57 五	高杯 ほぼ存	口径 22.6 器高 器径 15.5 15.5	淡黄~淡 橙褐色	密	良好	杯底部~柱状部ヘラによる 面取り、杯部ハケ後ハラミ ガキ(粗)、瓶部ハケ	杯部ハケ後ハラミガキ、柱 状部シボリ目後ナデ、瓶部 ハケ	4孔?(2孔残存)
58	高杯 柱状部	-	黑灰赤色	やや粗	良	ヘラによる面取り後横ヘラ ミガキ(密)	シボリ目・ナデ、瓶部ハケ	1孔残存
59	高杯	口径 17.7	明橙茶色	やや粗	良	ナデ後ハラミガキ(密)、端 部ヨコナデ	指揮さえナデ後ハケ、端部 ヨコナデ	1孔残存
60	高杯 杯部	口径 18.8	淡褐色	密	良好	ナデ後ハラミガキ(密)	ナデ後ハラミガキ(密)、最 終的に放射状へラミガキ	

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	その他の
61	高杯 杯部	口径 22.5	淡黄褐色 (淡米褐色)	密～や粗	良	ハケ後ヘラミガキ(密)、端部・杯底部ヨコナデ	ハケ・ヨコナデ後放射状ヘラミガキ	
62	高杯 杯部	口径 23.6	淡褐色	密	良好	ナデ後ヘラミガキ(密)	ナデ後ヘラミガキ(密)、最終的に放射状ヘラミガキ	
63	高杯 柱状・底部	—	淡褐色	やや粗	良	柱状部ヘラによる面取り後ナデ	柱状部シボリ目、底部ナデ	4孔(2孔残存)
64	高杯 底部	口径 14.6	淡褐色	やや粗	良好	ハケ後ヘラミガキ(密)、端部ヨコナデ	内面・ナデ・底部ハケ	1孔残存 底部中央に凹陥が めぐる
65	直口壺 口頭部	口径 13.0	明橙色	密	良好	腹ハケ後縫ヘラミガキ、端部ヨコナデ	ナデ後縫ヘラミガキ、端部ヨコナデ	
66	直口壺 口頭部	口径 14.3	白灰～淡 灰褐色	やや粗	良好	縫ハケ、底部ヨコナデ	縫ハケ後端部ヨコナデ	内面に黒斑
67	直口壺 口頭部	口径 14.7	灰黄褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	
68	直口壺 口頭部	口径 14.5	淡灰褐色	やや粗	良好	縫ハケの痕跡	タ	端付着
69	複合口縁壺 (山陰系) 口縁部	口径 15.5	淡橙～灰 白色	粗	良好	ヨコナデ	タ	
70	複合口縁壺 (山陰系) 口縁部	口径 18.4	白灰色	粗	良好	タ	タ	
71	大型鉢 (山陰系) 口縁部	口径 28.3	茶褐色	やや粗	良	タ	タ	
72	広口壺 口縁部	—	淡灰茶色 (暗赤褐色)	密～や粗	良好	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	口縁部外周面に網 目文・円形浮文の 痕跡
73	複合口縁壺 口縁部	—	淡褐色	密～や粗	良好	ナデ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	
74	広口壺 口縁部	口径 26.2	灰褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部外周面に凹 陥文(3条)
75	広口壺(V) 口縁部	口径 17.6	明淡橙色	密	良好	縫ヘラミガキ	ナデ・端部ヨコナデ	口縁部外周面にヘ ラによる削み目文
76	長調壺(V) 口縁部	—	淡灰褐色	やや粗～粗	良好	ヘラナデ・縫ハケ	ナデ	通底部に竹骨押圧 文(3個1組)
77	広口壺 口縁～体部	口径 9.3	淡灰色	密～や 粗	良好	縫ハケ後口縁部・颈部ヨ コナデ	口縁部横ハケ後ヘラミガ キ・ヨコナデ、体部ナデ	
78	広口壺 口縁～体部	口径 17.4	淡黄茶褐色	やや粗	良好	タ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	
79	広口壺 口縁～体部	口径 15.9	灰褐色	やや粗	良好	タ	体部横ハケ、颈部ヨコナデ 後縫ヘラミガキ、口縁部ヨ コナデ	
80	広口壺 口縁部	口径 11.9	淡褐色	密	良好	体部ナデ、腹部横ハケ、口 縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	その他
81	広口壺 頭部	口径 14.0	淡橙褐色	やや粗	良好	体部ナデ、頭部縫ハケ、II 縫部ヨコナデ	体部ナデ、口縫部ヨコナデ	
82	広口壺 口張部	-	灰白～淡 褐色	やや粗	良好	*	*	
83	壺 体部	-	赤褐色	やや粗	良好	縫ヘラミガキ	粘土帯接合部指揮さえ後ナ デ・ハケ	頭部にヘラ拭き 沈線文+竹管押庄 文
84	壺 体部	-	淡灰黄色	密～や や粗	良好	ヘラミガキ、突帯の貼り付 けはヨコナデ	粘土帯接合部を指揮さえ後 ヘラケズリ	頭部に貼り付け 突帯+刺み日文
85	壺 体部	最大径 20.1	淡橙褐色	密～や や粗	良好	体部下半ハケ・上半ヘラミ ガキ	粘土帯接合部を指揮さえ後 ハケ	焼付着
86	壺 体部	最大径 27.7	淡灰褐色	やや粗	良好	ヘラミガキ	粘土帯接合部を指揮さえ後 体部下半ハケ・上半ナデ	
87	壺 体～底部	最大径 26.7 底 径 5.7	明橙色 (灰黒色)	やや粗	良好	ヘラミガキ、肩部ヨコナデ、 底部周縁～底面ヘラケズリ	粘土帯接合部を指揮さえ後 ハケ、下半放射状ヘラミガ キ	
88	壺 底部	底 径 4.3	明橙～灰 褐色	やや粗 ～粗	良好	縫ハケ、底侧面～底面ナデ	クモの巣状のハケ	
89	壺 底部	底 径 5.0	乳火褐色 (黒褐色)	密	良好	ヘラミガキ	ナデ	
90	壺 底部	底 径 3.3	暗赤褐色	やや粗 ～粗	良好	ナデ	剥離のため調整不明	
91	壺 体～底部	最大径 27.3 底 径 6.1	淡灰褐色 (黒色)	やや粗 ～粗	良好	縫ハケ、底面ヘラケズリ	指ナデ後ヘラケズリ	
92	庄内系壺 口縫～体部	口径 11.9	茶褐色	粗	良	右上がりタタキ後ハケ、口 縫部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縫部ヨコナデ	
93	庄内系壺 口縫～底部	口径 14.0 高 16.5 最大径 16.7	茶褐色	粗	良好	体部右上がりタタキ後放射 状のハケ、口縫部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右下→左 上)、口縫部横ハケ	口縫部に擦付着 図上で復原
94	庄内系壺 口縫～体部	口径 14.4 高 17.3 最大径 18.6	灰褐色	やや粗	良	体部右上がりタタキ後ハ ケ? II 縫部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右下→左 上)、口縫部ヨコナデ	外面全体に擦付着
95	庄内系壺 口縫～体部	口径 13.4	淡灰茶色	やや粗	良好	*	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縫部ヨコナデ	
96	庄内系壺 口縫～体部	口径 13.8	淡灰茶色	やや粗	良好	体部右上がりタタキ、口縫 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縫部横ハケ	
97	庄内系壺 口縫部	口径 11.7	明褐色	密	良好	体部右上がりタタキの痕 跡、II 縫部ヨコナデ	体部ヘラケズリ、口縫部ヨ コナデ	
98	庄内系壺 口縫部	口径 13.1	茶褐色	やや粗	良好	*	*	
99	庄内系壺 ほぼ完存	口径 13.1 最大径 15.7 高 16.0	灰褐色～茶 褐色	粗	良好	体部右上がりタタキ後放射 状のハケ、口縫部ヨコナデ	ヘラケズリ(下→上・左下 →右上)、口縫部ヨコナデ	
100	庄内系壺 口縫部	口径 13.6	暗褐色	粗	良好	右上がりタタキの痕跡、口 縫部ヨコナデ	II 縫部ヨコナデ	

番号	器械・部位	法景(cm)	色調	胎士	焼成	外面調整	内面調整	その他
101	庄内系壺 口縁～体部	口 径 13.6	淡灰茶色 密～や や粗	やや粗	良好	体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左下→右 上)、口縁部横ハケ後ヨコ ナデ	
102	庄内系壺 口縁～体部	口 径 14.4	淡茶褐色 やや粗	良好		体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部ヨコナデ	ヘラケズリ後ナデ、口縁部 ハケ後ヨコナデ	
103	庄内系壺 口縁～体部	口 径 14.8	淡灰茶色 密～や や粗	良好		体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縁部ヨコナデ	
104	庄内系壺 口縁～体部	口 径 15.0	暗灰褐色 やや粗	良好		*	*	煤付着
105	庄内系壺 口縁～底部 最大径	口 径 13.6 最大径 15.5	灰褐色 (黒色)	粗	良好	体部右上がりタタキ後放射 状のハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(下→上・ 右下→左上)、口縁部横ハ ケ後ヨコナデ	底部・腹部に穿孔
106	庄内系壺 口縁部	口 径 14.0	茶褐色	粗	良好	体部水平タタキ後、口縁部 ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右下→左 上)、口縁部ヨコナデ	
107	庄内系壺 口縁部	口 径 14.4	黄白色	粗	良	体部右上がりタタキ、口縁 部横ハケ後ハケナデ	体部ヘラケズリ(下→上・ 左下→右上)、口縁部ヨコ ナデ	
108	庄内系壺 口縁部	口 径 15.6	淡橙茶色 やや粗	良好		*	体部ヘラケズリの痕跡、口 縁部ヨコナデ	
109	庄内系壺 口縁～体部	口 径 13.8	灰茶褐色 ～粗	やや粗	良好	体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ後ナデ、口 縁部ヨコナデ	煤付着
110	庄内系壺 口縁～体部	口 径 14.4	白灰色	粗	良好	体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左下→右 上)、口縁部ヨコナデ	
111	庄内系壺 口縁～体部 最大径	口 径 15.2 最大径 17.3	茶褐色 やや粗	良好		体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部ヨコナデ	*	
112	庄内系壺 口縁～体部 最大径	口 径 15.8 最大径 17.5	茶褐色 やや粗	良好		*	体部ヘラケズリ(右下→左 上)、口縁部横ハケ後ヨコ ナデ	
113	庄内系壺 口縁～体部	口 径 15.0	茶褐色 やや粗	良好		体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部指押さえ・ヨコ ナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部横ハケ後ヨコナデ	
114	庄内系壺 口縁～体部	口 径 18.1	暗茶褐色 (灰茶色)	粗	良	体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縁部ヨコナデ	煤付着
115	庄内系壺 口縁～体部	口 径 17.6	灰色	やや粗	良好	体部タタキ、口縁部ヨコナ デ	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縁部横ハケ後ヨコナデ	
116	庄内系壺 口縁～体部	口 径 15.9	淡褐色	やや粗	良	体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ、口縁部ヨ コナデ	
117	庄内系壺 口縁～体部	口 径 19.4	茶褐色	やや粗	良好	体部にタタキ、口縁部にハ ケの痕跡	体部ヘラケズリ(右→左)、 口縁部ヨコナデ	
118	庄内系壺 口縁～体部	口 径 18.1	茶褐色	密	良好	体部右上がりタタキ、口縁 部ヨコナデ	体部ヘラケズリ、口縁部横 ハケ後ヨコナデ	
119	庄内系壺 口縁～体部	口 径 12.2	灰褐色	やや粗	良好	体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部指押さえ・ ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部ヨコナデ	
120	庄内系壺 口縁～体部	口 径 14.4	灰褐色 密～や や粗	良好		体部右上がりタタキ後ハ ケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 屈曲部～口縁部ヨコナデ	煤付着

番号	器種・部位	法式(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	その他
121	庄内系壺 口縁～体部	口 径 15.8	暗灰褐色	密～や粗	良好	体部右上がりタタキ後ハケ、口縁部指押さえ・ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右下→左上)、口縁部ヨコナデ	
122	庄内系壺 八 八	口 径 14.6 底径 20.6	茶褐色	やや粗	良	*	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部ヨコナデ	
123	庄内系壺 口縁～体部	口 径 15.5	明灰褐色	粗	良	*	*	
124	壺 口縁～体部	口 径 12.3	淡灰茶色	やや粗	良好	体部右傾～横ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 焼付着 口縁部横ハケ	
125	壺 口縁～体部	口 径 14.0	淡灰茶色	やや粗	良好	体部横ハケ、口縁部ヨコナデ	*	
126	壺 口縁～体部	口 径 15.0	淡灰茶色	やや粗	良好	体部左傾～腹ハケ、口縁部ヨコナデ	*	
127	壺 口縁～体部	口 径 15.4	灰茶褐色	密	良好	体部右傾～横ハケ、口縁部指押さえ・ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 ヨコナデ	焼付着
128	壺 口縁～体部	口 径 16.7	茶褐色	やや粗～粗	良好	体部右傾～腹ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部横ハケ	焼付着
129	壺 口縁～体部	口 径 14.6	灰褐色	やや粗	良好	体部横ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部横ハケ後ヨコナデ	
130	壺 口縁～体部	口 径 15.0	淡灰茶色	やや粗	良	*	*	
131	壺 口縁～体部	口 径 16.5	淡灰褐色	やや粗	良好	体部左傾～腹ハケ、口縁部ヨコナデ	*	焼付着
132	布留式壺 口縁～体部	口 径 13.9	淡灰黄色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	
133	布留式壺 口縁～体部	口 径 15.9	白灰褐色	密～や粗	良好	*	*	
134	布留式壺 口縁～体部	口 径 15.0 最大径 19.2	淡橙～淡 茶色	やや粗	良好	体部下半左傾～腹ハケ・上半横ハケ後体部上方～口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左下→右上)、 屈曲部～口縁部ヨコナデ	煤少量付着
135	布留式壺 口縁～体部	口 径 19.6	灰黄褐色	粗	良好	体部横ハケ後体部上方～口縁部ヨコナデ	体部指押さえ後ヘラケズリ(左下→右上)、 口縁部ヨコナデ	煤少量付着
136	V様式系壺 はね完存 八	LH 径 12.2 器高 11.7 底径 3.6	灰褐色～明 茶褐色	やや粗	良好	体部下半右上がりタタキ、 上半右上がり～水平タタキ、 口縁部ヨコナデ	体部ハケ、口縁部ヨコナデ	分割成形時の接合 痕顯著に残る
137	V様式系壺 口縁～体部	LH 径 12.1	淡灰褐色	やや粗	良好	体部右上がり～水平タタキ、 口縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	
138	V様式系壺 口縁～体部	口 径 14.9 底径 15.2	明橙～淡 灰褐色	やや粗	良好	体部下半右上がりタタキ、 上半水平タタキ、 口縁部ヨコナデ	体部ハケ、口縁部ヨコナデ	焼付着、分割成形 時の接合痕顯著に 残る
139	V様式系壺 口縁～体部	口 径 14.5	明橙～淡 灰褐色	粗	良	体部水平タタキ、 口縁部ヨコナデ	*	
140	V様式系壺 口縁～体部	口 径 15.6 底径 3.9	淡橙灰色	密～や 粗	良好	体部下半右上がりタタキ、 上半右上がり～水平タタキ、 口縁部ヨコナデ	体部ナデ、 口縁部ヨコナデ	分割成形時に接合痕 顯著に残る

番号	器種・部位	法量 (cm)	色調	胎土	施成	外画調整	内面調整	その他
141	V様式系壺 口縁～体部	口径 16.8	淡褐色	粗	良	体部右上がり～水平タタキ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	
142	V様式系壺 口縁～体部	口径 17.0	淡黄灰色	密	良好	体部右上がりタタキ、口縁部ヨコナデ	*	
143	V様式系壺 口縁～体部	口径 16.2	明茶褐色	やや粗	良好	体部右上がりタタキ (上・中・下で方向替わる)、口縁部ヨコナデ	*	保・質化物付着、分割成形時の接合痕跡に残る
144	V様式系壺 修～底部	最大径 底 径 4.2 4.3	橙褐色	やや粗	良好	体部右上がりタタキ (上・中・下で方向替わる)	体部ナデ	保付着、分割成形時の接合痕跡に残る
145	V様式系壺 底部	底 径 3.6	橙褐色～黒 茶色 (火薙色)	密～や や粗	良好	右上がりタタキ、周縁～底 面ナデ	ナデ	
146	V様式系壺 底部	底 径 4.3	淡灰褐色	やや粗	良好	右上がりタタキ、周縁～底 面ナデ	ハケ後ナデ	
147	V様式系壺 底部	底 径 4.3	明赤褐色	密～や や粗	良好	右上がりタタキ、周縁～底 面ナデ	*	内面に炭化物付着
148	底部有孔壺 底部	底 径 3.8	明褐色	粗	良好	外画 内面	右上がりタタキ、周縁～底 面ナデ	底面中央に1孔
149	壺(他地方) 口縁～体部	口径 14.8	淡橙色	やや粗	良好	体部右上がり～水平タタキ、口縁部指揮さえ、ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	口縁部にヘラによる刻み目
150	壺(吉備系) 口縁～体部	口径 12.8	明橙色	やや粗	良	体部左焼～瓶ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)後 指揮さえ、口縁部ヨコナデ	口縁部外側面に 描き直線文の痕跡
151	壺(吉備系) 口縁～杯部	口径 15.0	灰褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部ヨコナデ	口縁部外側面に 描き直線文
152	壺(吉備系) 口縁～体部	口径 17.3	暗赤褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右)、 口縁部ヨコナデ	口縁部外側面に 描き直線文
153	壺(山陰系) 口縁部	口径 15.6	灰黃～灰 褐色	やや粗	良好	体部右瓶～瓶ハケ後体部上方に横ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(左→右上)、口縁部ヨコナデ	
154	壺(山陰系) 口縁～体部	口径 18.6	淡灰褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑あり
155	壺(他地方) 口縁～体部	口径 最大径 20.2	淡黄褐色 (淡黄褐色 ～黒色)	密～や や粗	良好	体部ナデ・ハラミガキ？口 縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ(右下→左 上)、口縁部ヨコナデ	保付着
156	大型鉢 口縁～体部	口径 30.0	明橙色 (淡褐色)	やや粗	良	体部水平タタキ(太)・口縁部ヨコナデ	ナデ・口縁部ヨコナデ	
157	小型鉢 ほぼ完全	口径 高径 底 径 7.5 5.3 3.3	淡褐色	やや粗	良好	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・口縁部ヨコナデ	
158	鉢 口縁～体部	口径 12.7	淡褐色	やや粗	良好	ハケ	ハケ	擬口縁、縁部未調整
159	小型高杯？ 脚部	口径 11.1	淡褐色	やや粗	良好	ハラミガキ、裾縁部ヨコナ デ	ハラミガキ、裾縁部ヨコナ デ	
160	鉢 口縁～体部	口径 16.0	灰褐色	やや粗	良好	体部ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ハケ、口縁部ヨコナデ	

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	その他
161	鉢 口縁～体部	口径 19.2	茶褐色	粗	良	体部ハケ、口縁端部ヨコナデ	体部ハケ、口縁端部ヨコナデ	
162	製塙土器 口縁部	口径 8.4	明黄褐色	密～や粗	良好	右上がりタタキ	ナデ	
163	製塙土器 脚台部	口径 4.3	淡明褐色	やや粗	良好	指ナデ	指ナデ	手づくね成形
164	高杯(V) 杯部	口径 26.5	茶褐色	やや粗	良好	ヘラミガキ・杯体部と底部の境にハケ	ヘラミガキ・杯体部と底部の境にナデ	
165	高杯(V) 杯底～柱状部	-	黄褐色	密～や粗	良好	ヘラミガキ	シボリ目・ナデ	3孔?(2孔残存)
166	高杯(V) 杯底～柱状部	-	灰黄褐色	やや粗	良好	杯部ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ・柱状部シボリ目・ナデ	3孔残存
167	高杯(V) 柄部	握径 17.7	橙褐色	粗	良好	ヘラミガキ	ナデ	
168	土筋器小皿 口縁～体部	口径 11.1	淡黄褐色	やや粗	良好	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	2区204層出土
169	須恵器杯 高台部	高台径 6.1 高台高 0.5	灰白色	密	良	回転ナデ	回転ナデ	2区204層出土
170	土筋器甌 口縁～体部	口径 15.2	明橙色	密	良好	接合部指押さえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	2区204層出土
171	高杯(V) 杯体部	-	灰褐色	やや粗	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2区204層出土、 弥生V様式
172	高杯(V) 脚柱状部	-	淡橙茶色	やや粗	良好	ヘラによる面取り後ヘラミガキ	シボリ目・ナデ	2区204層出土、 弥生V様式
173	小型丸底甌 口縁～底部	口径 12.3 高 7.7	黄系色	密	良好	ヘラケズリ・ハケ後ナデ、 ヘラミガキ	体部ハケ後ナデ、口縁部ヘラミガキ・ヨコナデ	
174	小型酉唇 体部～把部	握径 10.9	橙褐色	密	良好	ナデ、ヨコナデ	据部ヘラケズリ後ハケ、受部クモの巣状ハケ後ナデ	
175	高杯 口縁～据部	口径 16.3 握径 11.4 高 14.5	淡橙茶～ 淡褐色	密	良好	柱状部ヘラによる面取り後 ヘラミガキ、杯部ナデ・ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	杯部ヨコナデ、据部指押さえ・ハケ後ヨコナデ	
176	甌 口縁～体部	口径 13.4	淡橙色	やや粗	良	体部右上がりタタキ後ハケ、 口縁部ヨコナデ	ヘラケズリ(左→右)、口縁部ハケ後ヨコナデ	
177	甌 口縁～体部	口径 18.4	淡橙色	やや粗	良好	体部左傾・親ハケ、口縁部ヨコナデ	体部ヘラケズリ	
178	甌 口縁～体部	口径 10.7	淡灰褐色～ 暗赤褐色	やや粗	良好	口縁部のヨコナデの他は調整不明	体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	焼付着
179	甌(阿波系) 口縁～体部	口径 最大径 20.0	春梅～灰褐色	密	良好	左傾・親ハケ、口縁部ヨコナデ	指押さえ、口縁部ヨコナデ	焼付着
180	大型甌 (山形系) 口縁部	口径 32.6	淡橙～淡灰褐色	やや粗	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	

第4章 調査の成果

今回の調査地は、小面積ではあったが、多大な成果が得られたと言える。以下に今回の調査成果を箇条書きにしてまとめとする。

- 1) 現地表下1.4~1.6m程度の比較的浅いところで古墳時代前期(布留式古段階)の濃密な遺物包含層に達する。遺構面はT.P.+9.2~9.4m程度である。1区で検出されたこの時期の土器類は、小型の精製器種・穿孔を有するものなどがあり、日常使用の雑器とは考えにくい。と同時に、1区で検出された「石」も意味のあるものかもしれない。
- 2) この遺物包含層中には、弥生時代後期(V様式期)~古墳時代前期初頭(庄内式期)の特徴を持つ遺物も含まれている。このことは、中河内の低湿地ではそれほどまれなことではない。古い時代の遺物が混入しただけなのか、古い時代の遺物の中に、古墳時代前期(布留式期)まで存続するものがあるのか、古い時代の遺構・遺物包含層が104層・206層の下部に存在していたのかということの3点に違いないが、その3点を遺物からだけでなく、現地で確認することが今後の課題となろう。
- 3) 両調査区で、古墳時代前期の遺構ベース(105層・207層)中に、弥生時代中期から後期にかけての遺物(3・171・172)が含まれていることから、近隣に弥生時代の遺構面のあることが示唆される。
- 4) 下層部分で確認した砂の層(109層・211層)は、河川流出土の可能性があり、堆積状況から、1区側(東側)が本流に近いことがわかる。また、上層の105層・207層出土遺物や近隣の調査結果から、この河川は弥生時代中期までには埋没していたことがわかる。

参考文献

- 1 山本 博 1971「竜田越え」学生社
- 2 山本 昭 1976「東弓削遺跡」大阪府水道部送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査－『八尾市文化財調査報告3』八尾市教育委員会
- 3 高萩千秋 1983「9 東弓削遺跡」「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要」(財)八尾市文化財調査研究会
- 4 山本 昭 1984「8 中田遺跡(八尾木地区)」「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 5 福田英人 1986「中田遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- 6 鳥村友子 1987「中田遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
- 7 西村公助 1987「5 東弓削遺跡(第2次調査)」「昭和61年度事業報告」八尾市文化財調査研究会報告14 (財)八尾市文化財調査研究会
- 8 鳥村友子 1988「8 中田遺跡(86-532)の調査」「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告17 八尾市教育委員会
- 9 成海佳子 1994「III 東弓削遺跡(第3次調査)」「文化財調査研究会報告40」(財)八尾市文化財調査研究会
- 10 原田昌則 1989「10 東弓削遺跡(第4次調査)」「八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度」八尾市文化財調査研究会報告25 (財)八尾市文化財調査研究会
- 11 米田敏幸 1990「13 中田遺跡(89-331)の調査」「八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告20
- 12 坪田真一 1992「II 中田遺跡(第3・4次調査)」「中田遺跡」八尾市文化財調査研究会報告35 (財)八尾市文化財調査研究会
- 13 清 翁 1991「17 中田遺跡(90-330)の調査」「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会
- 14 原出昌則 1991「V 東弓削遺跡(第5次調査)」「八尾市文化財調査研究会報告32」(財)八尾市文化財調査研究会
- 15 坪田真一 1995「III 中田遺跡(第8次調査)」「中田遺跡」八尾市文化財調査研究会報告49 (財)八尾市文化財調査研究会
- 16 清 翁 1993「6 東弓削遺跡(91-373)の調査」「八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告28 八尾市教育委員会
- 17 坪田真一 1993「IX 中田遺跡(第13次調査)」「八尾市文化財調査研究会報告39」(財)八尾市文化財調査研究会
- 18 成海佳子 1993「X VII 東弓削遺跡(第6次調査)」「八尾市文化財調査研究会報告39」(財)八尾市文化財調査研究会
- 19 坪田真一 1994「35 中田遺跡(第19次調査)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 20 吉田野乃 1995「6 東弓削遺跡(93-298)の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告32 八尾市教育委員会
- 21 西村公助 1996「V 東弓削遺跡(第8次調査)」「八尾市文化財調査研究会報告50」(財)八尾市文化財調査研究会
- 22 吉田野乃 1995「17 東弓削遺跡(94-484)の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告31 八尾市教育委員会
- 23 原田昌則 1997「X III 東弓削遺跡(第9次調査)」「八尾市文化財調査研究会報告53」(財)八尾市文化財調査研究会

図版



1区落ち込み(105層上面)東部(南から)



同 西部(北から)



1区調査風景(103層掘削)



1区調査風景(104層掘削)



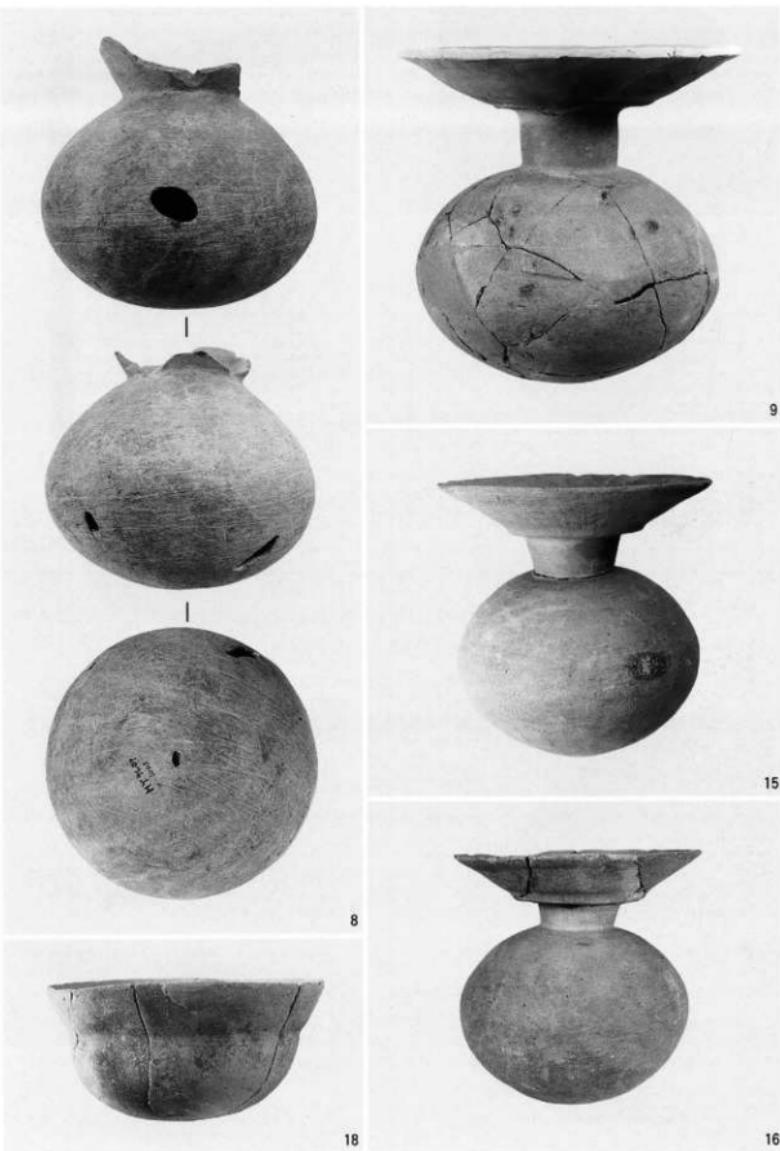
1区調査風景(109層掘削)



2区調査風景(206層掘削)



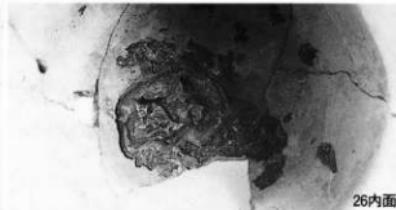
2区207層上面全景(東から)



1区104層出土遺物—1



25内面



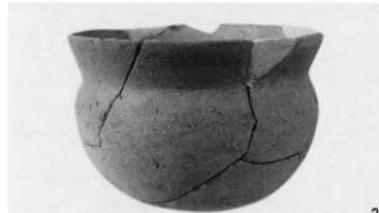
26内面



25



26



24



30



33



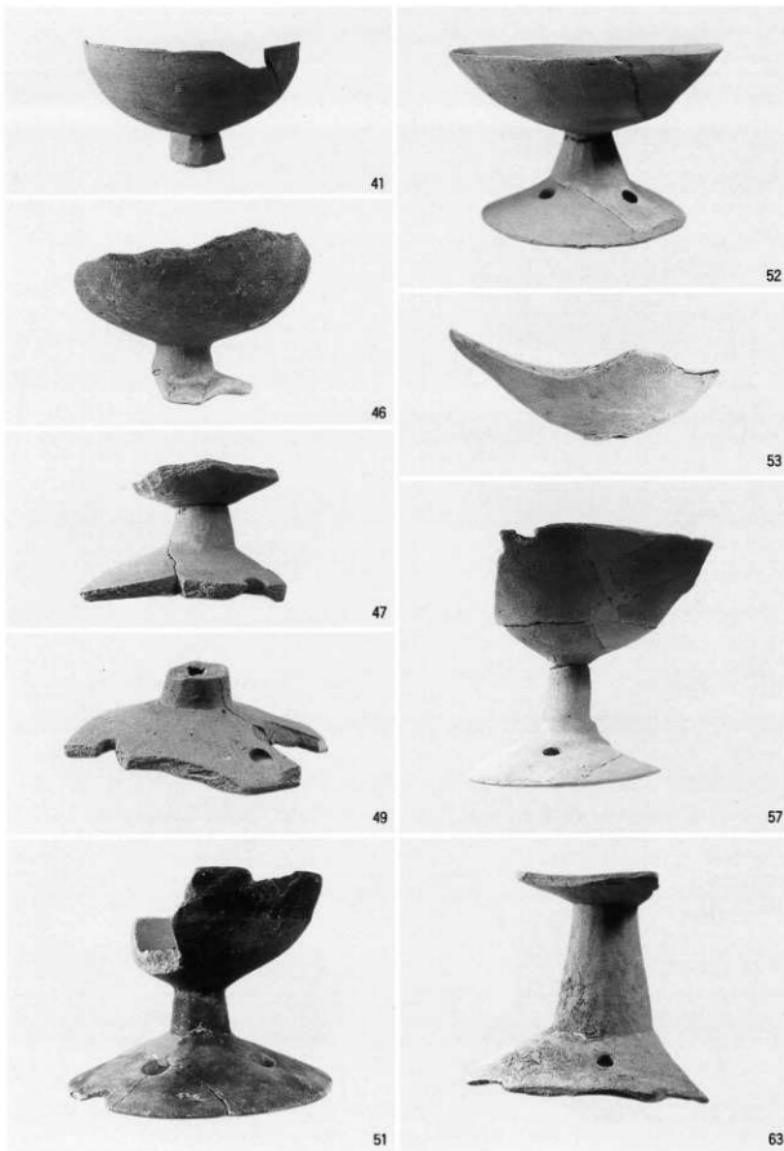
37



38



39



1区104層出土遺物一-3

圖版六



65



80



67



82



66



85



77



86



79



87



93



94



111



99



107



112



105

1区104層出土遺物一5



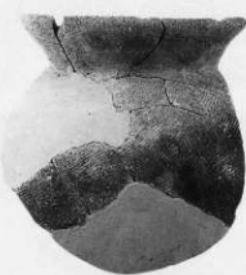
113



123



136



122



143



138



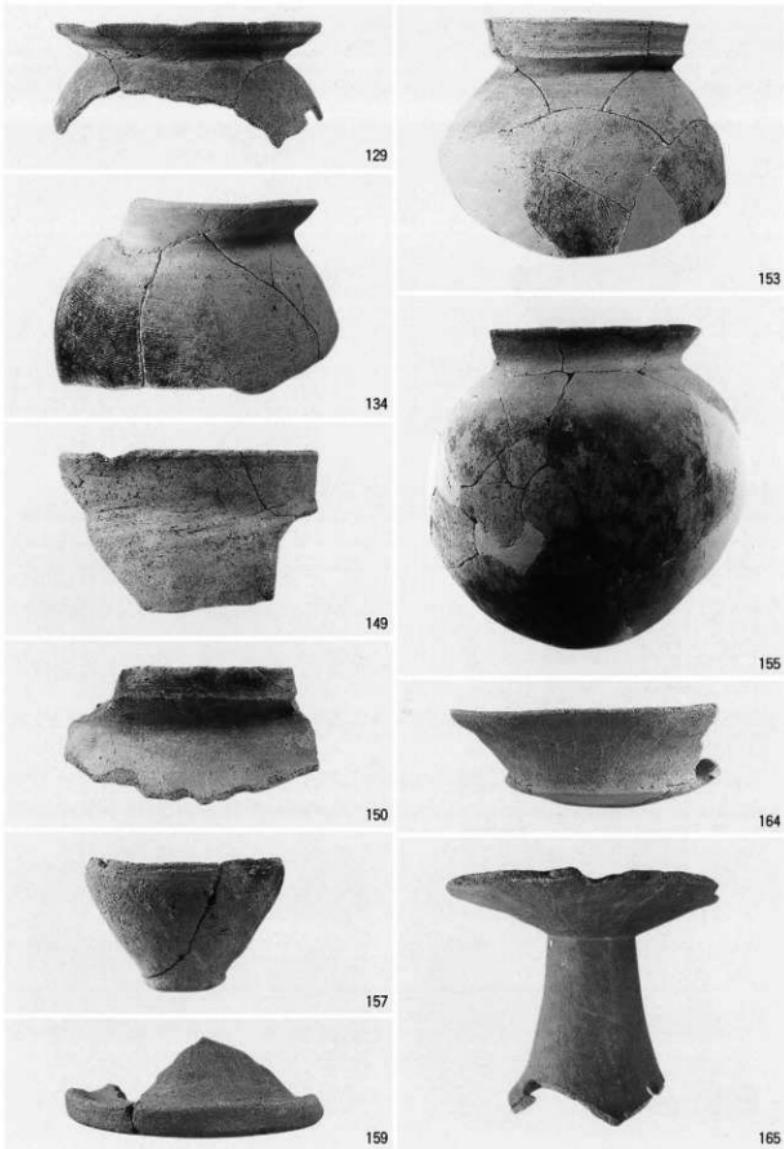
144



140



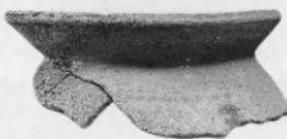
148



1区104層出土遺物-7



173



176



174



178



175



179



— —



— —



VI 八尾南遺跡第21次調査（Y S 94-21）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若林町2丁目13、15で実施した遊戯場建築に伴う八尾南遺跡第21次調査（YS94-21）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋12号 平成7年4月5日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が㈱浪速軽金属工業所から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成7年3月27日に着手し、同年4月27日に終了した。調査面積は742.8m²である。
1. 現地調査には、垣内洋平・濱田千年・山内千恵子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。
1. 本書で用いた方位は、現地でコンパスにより測定した磁北を『西偏角6°20'』により修正した座標北である。

本　文　目　次

第1章 はじめに.....	157
第2章 調査概要.....	159
第1節 調査方法.....	159
第2節 基本層序.....	160
第3節 検出遺構と出土遺物.....	162
第3章 まとめ.....	175

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (S=1/5000)	157	第12図 S K13平面・断面図 (S=1/50)	166
第2図 地区割図 (S=1/600)	159	第13図 S D01断面図 (S=1/30)	167
第3図 基本層序 (S=1/40)	160	第14図 S D02断面図 (S=1/30)	167
第4図 遺構平面図 (S=1/250)	161	第15図 S D01出土遺物 (土器:S=1/4、石器:S=2/3)	168
第5図 S E01平面・断面図 (S=1/20)	162	第16図 溝出土遺物 (土器:S=1/4、石器:S=2/3)	169
第6図 S E01出土遺物 (S=1/4)	162	第8図 S K06平面・断面図 (S=1/50)	164
第7図 S K02平面・断面図 (S=1/50)	163	第17図 S D14断面図 (S=1/40)	171
第9図 S K07平面・断面図 (S=1/50)	164	第18図 S D16断面図 (S=1/30)	172
第10図 S K09平面・断面図 (S=1/50)	164	第19図 包含層出土遺物 (土器:S=1/4、石器:S=2/3)	174
第11図 土坑・落ち込み出土遺物 (S=1/4)	165		

表 目 次

表1 周辺の調査一覧表	158
表2 ピット (S P01~42) 法量表	173

図 版 目 次

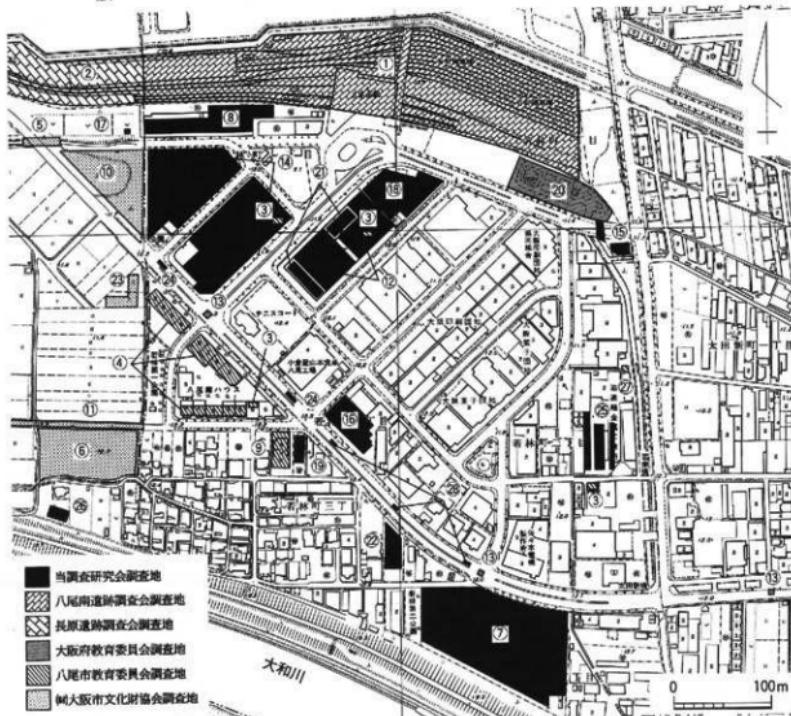
図版1	1区 全景 (南から)	2区 全景 (北から)
	3区 全景 (北から)	3区 南端部 全景 (北から)
図版2	S E01 (南から)	S E01底部 土器 (1・2) 出土状況 (東から)
	S K02 (南から)	S K07 (北から)
図版3	S D01 < 2区 > (南東から)	S D01 < 2区 > (北西から)
	S D01 < 3区 > 東壁	S D02 < 2区 > (東から)
	S D02 < 1区 > 土器 (49・50)	出土状況 (東から) S D02 < 3区 > 東壁
図版4	S D14 < 3区 > (北から)	S D16 < 2区 > (南東から)
	S D16 < 2区 > 西壁	S D16 < 3区 > (北西から)
	S D16 < 3区 > 東壁	3E区東壁下層
図版5	出土遺物 S E01 (1・2)、S K02 (7)、S K07 (11・12・21・22・24)	
図版6	出土遺物 S K07 (16・17)、S D01 (27・28・39・40・48)	
図版7	出土遺物 S D01 (41・44)、S D02 (49~51)、S D03 (54)、1区包含層 (58)	
図版8	出土遺物 S D02 (53)、1区包含層 (63・64)	

第1章 はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市の南西部に位置し、現在の行政区画では若林町・西木の本がその範囲になっている。地理的には、南方から北に伸びる羽曳野丘陵の先端部から、緩やかに傾斜して河内平野に至る縁辺部に位置しており、現地表面の標高では13.0m～10.0mと、北に向かって下がってゆく地形を呈している。また南方には現大和川が西流している。周辺での遺跡としては、東側の八尾市域には木の本遺跡・太田遺跡、西側の大阪市域には長原遺跡が隣接し、大和川を挟んで南側の藤井寺市域には津堂遺跡が、また北部には城山古墳跡・六反古墳跡がある。

当遺跡は、地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴い、昭和51年に長原遺跡調査会により行われた試掘調査により認識された。そしてその結果を受けて、昭和53～54年度に八尾南遺跡調査会による当遺跡最初の発掘調査①が実施された。それ以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施され、当遺跡は旧石器時代から続く遺跡であることが確認されている。

注1



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

西接する長原遺跡においては、層位学的調査の蓄積により中位段丘構成層にまで及ぶ標準層序（長原層序）が確立されつつあり、当遺跡においてもその有効性が認められている。長原層序では3回の火山灰の降灰（横大路・阪手・平安神宮火山灰）が確認され、これは後期旧石器の時期決定において基準となる鍵層として認識されており、当遺跡でもこれまでに旧石器出土第1地点^{第2}～第6地点が確認されている。また長原層序をもとに古地形の復原も試みられており、長原遺跡東南部から八尾南遺跡にかけての沖積面下に存在する「古川辺谷」と呼ばれる埋没谷付近に、旧石器出土地点が分布することが明らかになっている。^{第3}

このような情勢下の平成6年、鳥林一男氏（当初）から、八尾市若林町2丁目10～21における分譲住宅建設（当初）の届出書が、八尾市教育委員会文化財課に提出された。これを受けて同文化財課では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成6年6月7日に遺構確認調査を実施した。^{第4}その結果、古墳時代前期（庄内式期）の遺物包含層が確認され、同文化財課では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査（遊戯場建築に伴う）にあたっては、事業者（株浪速軽金属工業所）・文化財課・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

番号	調査主体・調査（旧石器出土地点）	調査年月	文獻	(※=引用)
①	八尾南遺跡発掘委員会 （第1地点）	昭和53年7月～昭和54年12月	『八尾南遺跡』1981	
②	長原遺跡調査会	昭和53年7月～昭和54年8月	『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』1982	
③	八尾市教育委員会	昭和55年6月	『八尾市文化財調査報告6』1981	
④	八尾市教育委員会	昭和55年12月～昭和56年1月	未報告	
⑤	大阪市文化財協会（N G81-2）	昭和57年3月	※『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』1983	
⑥	側大阪市文化財協会（N G82-41）	昭和57年2月～	『境地説明会資料』1983	
⑦	研究会・第1次（Y S82-01）	昭和58年2月～6月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告5』1984	
⑧	研究会・第2次（Y S83-02） （第2地点）	昭和59年1月～7月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告7』1985 『山石器考古学』38 1989 旧石器文化談話会	
⑨	八尾市教育委員会	昭和59年7月	『八尾市文化財調査報告11』1985	
⑩	大阪市文化財協会（N G86-3）	昭和61年4月～10月	『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財・包装地発掘調査報告』1988	
⑪	側大阪市文化財協会（N G86-13）		※『昭和61年度 大阪市内埋蔵文化財・包装地発掘調査報告』1988	
⑫	研究会・第5次（Y S87-05）	昭和61年9月～昭和62年7月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告16』1988	
⑬	大阪府教育委員会 （第3地点）	昭和62年4月～6月	『八尾南遺跡・山石器出土第3地点』1988	
⑭	研究会・第8次（Y S87-08） （第4地点）	昭和62年5月～昭和63年1月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告47』1995	
⑮	研究会・第9次（Y S87-09）	昭和62年7月～8月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告16』1988	
⑯	研究会・第12次（Y S88-12）	昭和63年8月～10月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告47』1995	
⑰	研究会・長原第1次（N G88-01）	昭和63年8月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告25』1989	
⑱	研究会・第13次（Y S88-13） （第5地点）	昭和63年9月～平成元年2月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告25』1989	
⑲	研究会・第14次（Y S89-14）	平成元年5月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告28』1990	
⑳	大阪府教育委員会 （第6地点）	平成元年7月～平成2年6月	『八尾南遺跡発掘調査概要・II』1991 『八尾南遺跡』1993	
㉑	研究会・第15次（Y S89-15）	平成元年11月～平成2年2月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告28』1990	
㉒	研究会・第17次（Y S91-17）	平成3年1月～2月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告47』1995	
㉓	側大阪市文化財協会（N G93-56）	平成5年10月～11月	『墓火 49号』1994	
㉔	研究会・第20次（Y S91-20）	平成6年6月	『平成6年度 勘八尾市文化財調査研究会事業報告』1995	
㉕	研究会・第21次（Y S94-21）	平成7年3月～4月	今岡報告	
㉖	研究会・第23次（Y S95-23）	平成7年4月	『平成7年度 勘八尾市文化財調査研究会事業報告』1996	
㉗	八尾市教育委員会（95-248）	平成7年8月	『八尾市文化財調査報告33』1996	
㉘	研究会・第24次（Y S95-24）	平成7年9月	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告54』1996	

表1 周辺の調査一覧表

第2章 調査概要

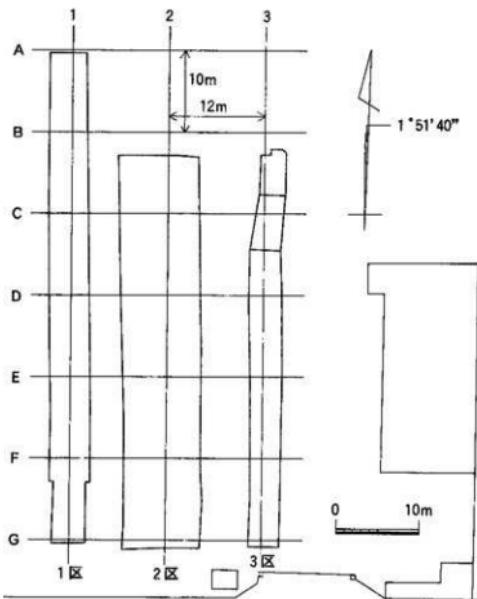
第1節 調査方法

今回の調査は、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した第21次調査で、遊戯場建築に伴う発掘調査である。

調査区は南北に細長いトレンチ3本に分かれており、西から1～3区とし、1区→3区→2区の順に調査を実施した。

調査は、八尾市教育委員会の試掘データを参考に、現地表下1.1m～1.5mまでを機械掘削とし、以下の約0.2mを人力掘削により実施した。また1区南端・3区中央において、現地表下約3.2mまでの下層断面確認調査を機械掘削により実施し、旧石器時代相当層の確認に努めた。

地区割は、東西方向については、南北方向の平行するライン（1～3ライン：12m間隔）を各トレンチに通す形をとり、これに直交する東西ライン（A～Gライン）を10m間隔に設定した。そして地区名は北交点番号に代表させた。なお現地におけるコンパスでの計測によると、この南北ラインは磁北より東に $4^{\circ} 28' 20''$ 、また真北より西に $1^{\circ} 51' 40''$ 振っている。



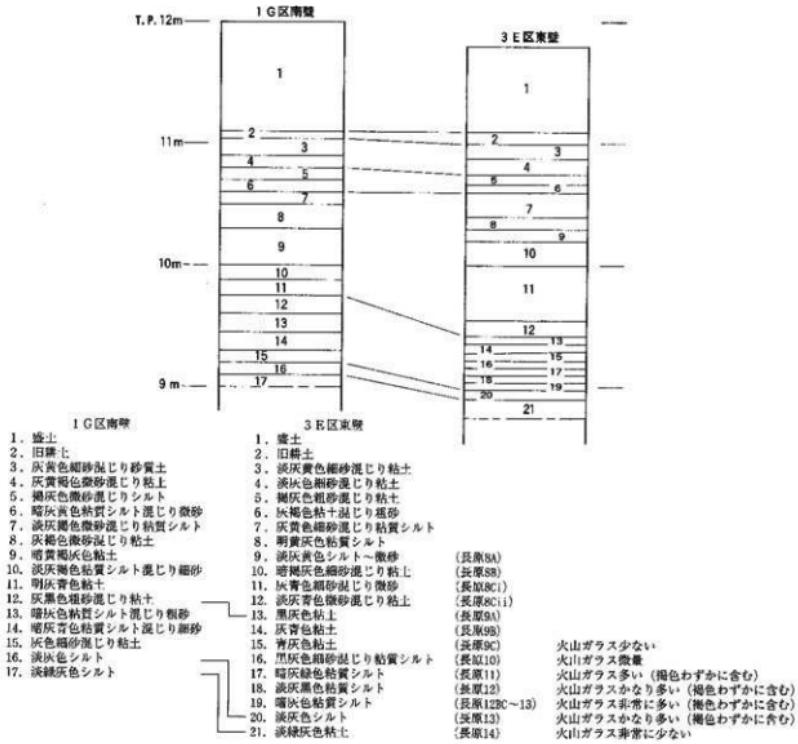
第2図 地区割図 ($S = 1/600$)

第2節 基本層序

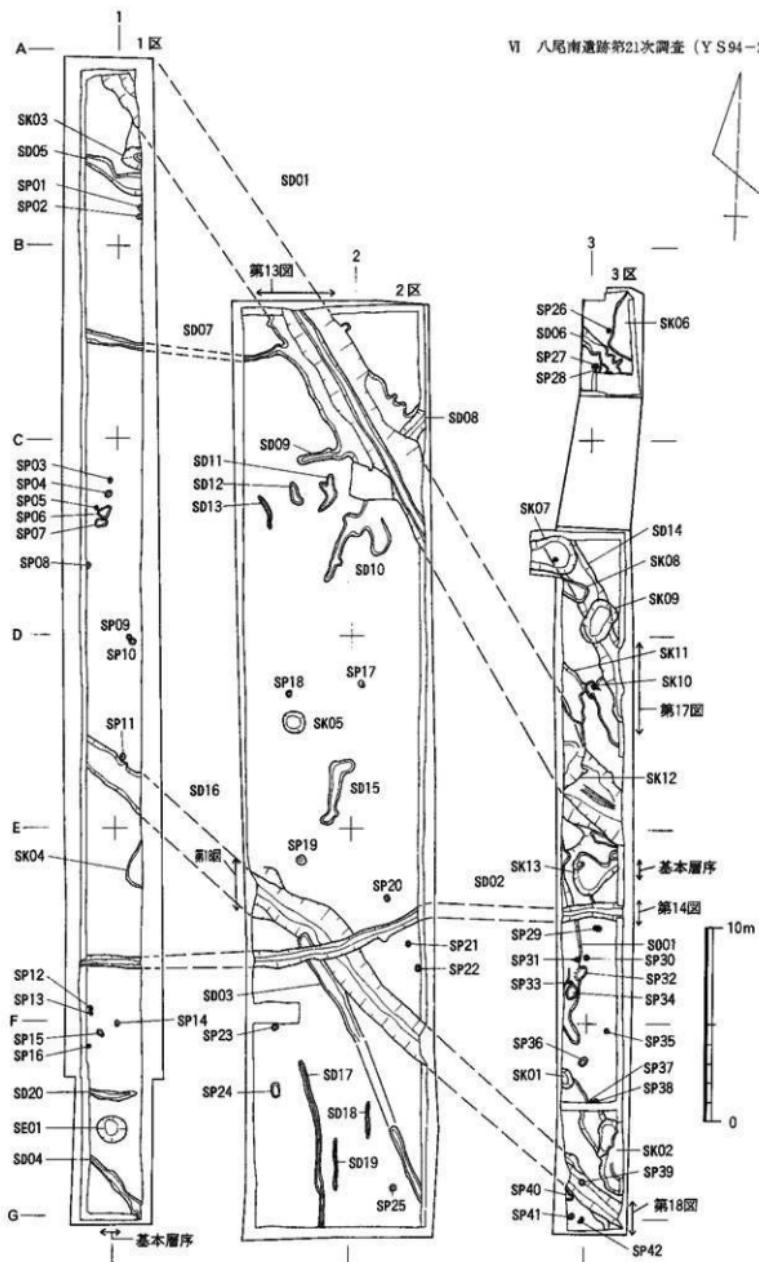
第1層は盛土、第2層が旧耕土である。第3層・第4層は層相が類似している。ほぼ第4層までを機械により掘削した。機械掘削の際、第4層から奈良時代～平安時代頃の須恵器が出土している。第5層は弥生時代後期～古墳時代前期（庄内式期）の包含層であるが、遺物量は少ない。庄内式期のものは3区北部でわずかにみられたのみである。第6層も弥生時代後期の包含層であるが、遺物の量はさらに少量である。第7層がベース層となり、以下からは遺物は出土していない。

第7層以下の層位は、1G区南壁・3E区東壁における下層確認調査による部分的な確認であり、面的な調査は実施していないが、当地の層序は長原層序との対応がおおむね可能であった。ベースとなる第7層以下、第12層までの約1mの水成層は長原8層にあたる。旧石器時代相当層である長原13・14層は、標高9m前後に堆積しているようである。³⁵

また3E区第15層以下の土層については、火山ガラスの確認を実施した。³⁶その結果すべての土層において火山ガラスの存在が認められ、長原14層には違していない可能性がある。



第3図 基本層序 (S = 1/40)



第4図 遺構平面図 (S = 1 / 250)

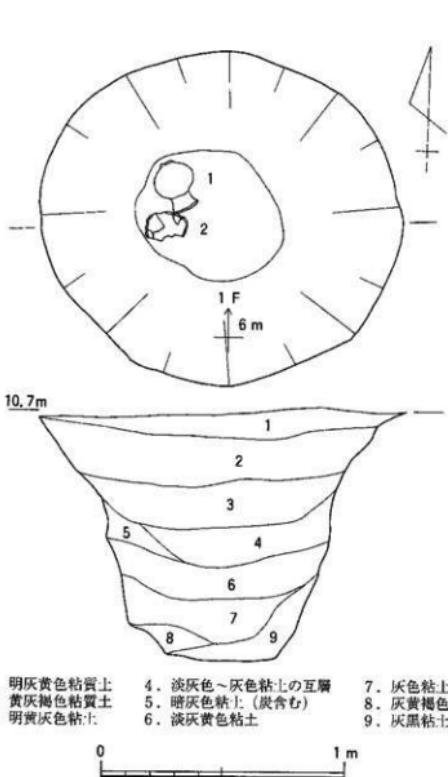
第3節 検出遺構と出土遺物

第5層上面と第7層上面で、井戸1基（S E01）・土坑13基（S K01～13）・溝20条（S D01～20）・落ち込み1基（S O01）・ピット42個（S P01～42）を検出した。第5層上面で検出したものは、S E01、S K01・02、S D01～04である。

S E01

1F区、第5層上面で検出した素堀りの井戸で、平面形は南北約1.4m・東西約1.5mのほぼ円形を呈する。断面ほぼ逆台形で、検出面からの深さは約1.0mを測る。埋土は上部が黄灰色系、下部が灰色～暗灰色系の粘土層を基調とするもので、底部付近には一部粗砂層がみられる。遺物は、底部西側から弥生時代後期に比定される壺2点（1・2）が出土している。

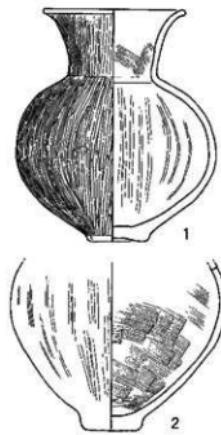
1は広口壺で口縁部が一部欠損している。調整は外面全面と体部内面縦方向のヘラミガキ、頸部内面ハケである。体部外面の約1/3は黒斑により黒色を呈している。2は外面縦方向のヘラミガキ、内面ハケである。



第5図 S E01平面・断面図 (S=1/20)

S K01

3F区で検出した土坑で、西側は調査区外に至り平面形は不明である。規模は94cm×56cm以上・深さ約14cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は淡褐色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

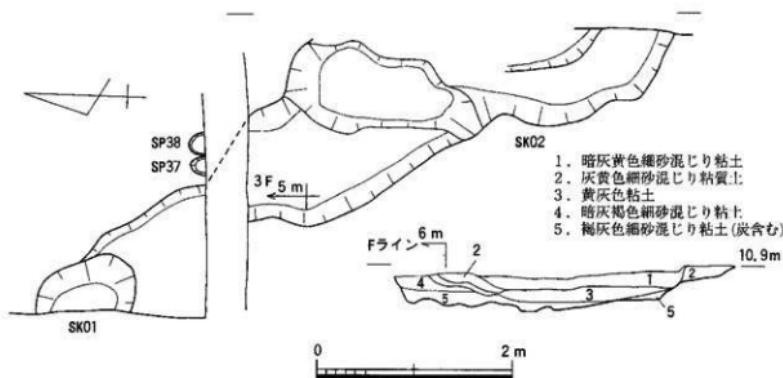


第6図 S E01出土遺物 (S=1/4)

SK02

3F区で検出した北西-南東方向の溝状の土坑で、東部は調査区外に至る。規模は6.3m以上×1.3m・深さ10cm~45cmを測り、底部には2.0m×0.9mの不定形の落ち込みがみられる。断面逆台形を呈し、埋土はおおむね上層が黄灰色系粘土、下層が褐灰色系細砂混じり粘土で、最下層には炭を含んでいる。

遺物は弥生時代後期の土器が出土しており、壺底部(3~6)・高杯脚部(7)を図化した。7は四方孔を有する。



第7図 SK02平面・断面図 (S=1/50)

SK03

1A区で検出した土坑で、東部は調査区外に至り平面形は不明である。規模は110cm×93cm以上・深さ約25cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は褐灰色粘土混じり粗砂~細砂である。遺物は出土していない。

SK04

1E区で検出した土坑で東部は調査区外に至り平面形は不明である。規模は240cm×76cm以上・深さ約7cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰黄色微砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

SK05

2D区で検出したほぼ円形の土坑である。規模は112cm×104cm・深さ約12cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上層が暗黄灰色微砂混じりシルト、下層が黄灰色粘土混じりシルトである。遺物は出土していない。

SK06

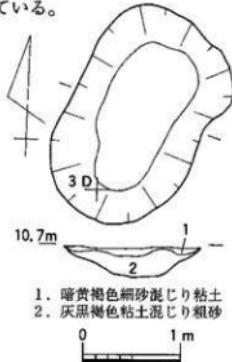
3B区で検出した土坑で、東部は調査区外に至り平面形は不明であるが、検出部分は方形の角部を呈している。規模は3.6m以上×1.1m以上・深さ約11cmを測る。断面皿状で、底部には起伏

がある。埋土は上層が暗灰色細砂混じり粘土、下層が暗黄褐色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

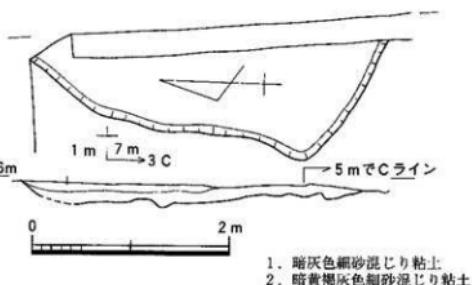
S K 07

3 C 区で検出した平面不定形の土坑で、S D 14 埋没後の遺構である。規模は南北約2.0m・東西2.3m以上・深さ約27cmを測る。断面皿状で、埋土は上から褐灰色粗砂混じり粘土・黄灰色粘土・暗灰黄色細砂混じり粘土・暗灰黄色細砂混じり粘質シルトである。

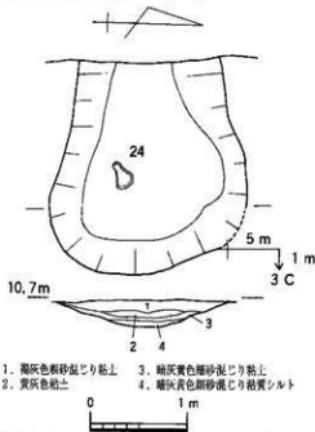
出土遺物には弥生時代後期の土器があり、壺(8~15)、甕(16~18)、高杯(19~22)、鉢(23)を図化した。他に割れた台石(24)が1点、図化した面を下にして出土している。壺には広口壺(8~10)と長頸壺(11)がある。8の口縁端部外面にはハケあるいは櫛描文が認められ、中国地方からの搬入品かもしれない。11は口縁部外面に黒斑が認められる。12は体部外面へラミガキである。甕では16の外面にハケが認められることから、当遺構の時期は庄内式期古相まで下る可能性があろう。内面調整はいずれも不明である。21・22は椀状高杯の杯部で、21は内外面へラミガキを施す。22は調整不明。台石(24)は両面に使用痕が認められ、図化した面はほぼ全面、裏面は約1/2を使用している。



第10図 S K 09平面・断面図(S=1/50)



第8図 S K 06平面・断面図(S=1/50)



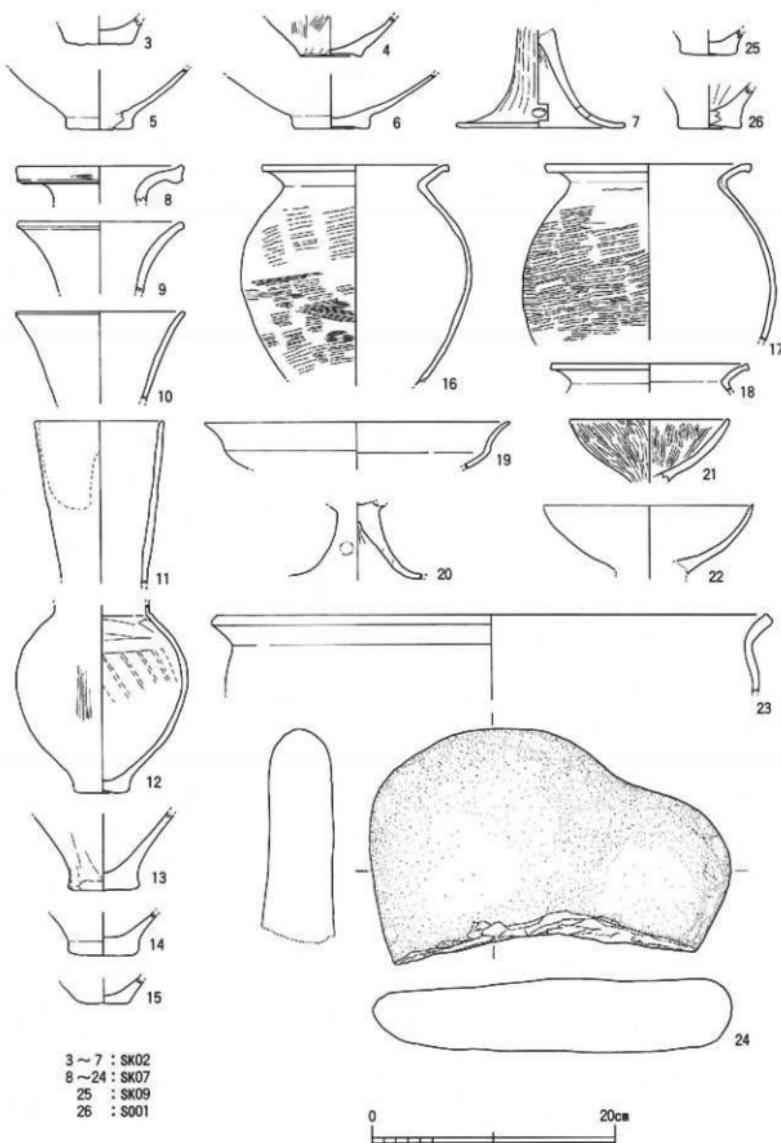
第9図 S K 07平面・断面図(S=1/50)

S K 08

3 C 区で検出した土坑で、西部は調査区外に至り平面形は不明である。規模は1.4m以上×0.9m・深さ約11cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は褐灰色粗砂混じり粘土である。S D 14 埋没後の遺構である。遺物は出土していない。

S K 09

3 C 区で検出した平面長方形に近い楕円形の土坑である。規模は228cm×135cm・深さ32cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗黄褐色細砂混じり粘土、下層が灰黑褐色粘土混じり粗砂である。S K 07と同様S D 14 埋没後の遺構である。遺物は弥生時代後期に比定される土器が出土しているが、図化したものは底部(25)のみである。



第11図 土坑・落ち込み出土遺物 (S = 1 / 4)

S K10

3 D区で検出した平面不定形の土坑である。規模は96cm×70cm・深さ約9cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色粘土混じり粗砂である。遺物は出土していない。

S K11

3 D区で検出した土坑で、西部は調査区外に至り平面形は不明である。規模は2.6m×1.1m以上・深さ約11cmを測る。断面皿状で、埋土は褐灰色粗砂混じり粘土である。S D01埋没後の遺構である。遺物は出土していない。

S K12

3 D区で検出した平面不定形の土坑で、西部は調査区外に至り平面形は不明である。S D01埋没後の遺構で、またS K11を切っている。規模は4.8m以上×1.1m以上・深さ33cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上から灰褐色細砂混じり粘土、灰黃褐色細砂混じり粘土、黃灰褐色微砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

S K13

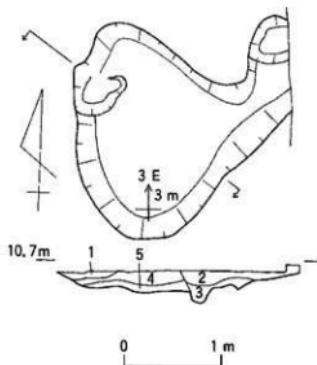
3 E区で検出した平面不定形の土坑で、東部は調査区外に至る。規模は2.3m以上×1.0m・深さ23cm~34cmを測る。断面皿状を呈し、底部にはピット状の落ち込みもみられる。埋土は上部が灰褐色系粘土、下部が灰褐色系粘質シルト混じり砂層である。遺物は出土していない。

S D01

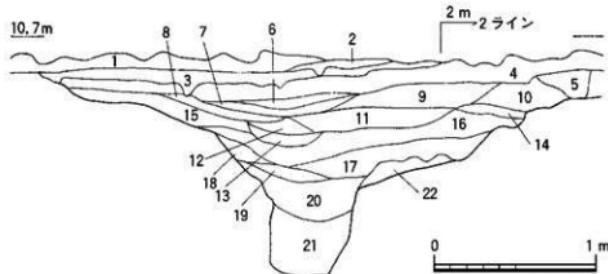
1区~3区にわたって検出した北西~南東方向の直線的な溝で、第5層上面の検出である。溝の方向はE-35°-Nである。規模は検出長約47.5m・幅2.2m~3.7m・深さ1.2m~1.4mを測る。底部のレベルにはあまり差はない。断面形状はほぼ逆台形であるが二段掘りになっており、底部には幅0.4m~0.6m・深さ約30cmの溝が垂直近くに掘られている。埋土はおおまかにみて上層が砂を多量に含む粘土層、中層が粘土~砂の複雑な堆積、下層が砂を基調としたシルトとの互層となっており、流水状況が窺える。

なおS D07やS D08のように、当溝から枝分かれする状況の溝があり、これらは有機的に関連していたものと考えられる。

遺物は主に上部の砂混じり粘土層から出土している。弥生時代後期の土器が主で、壺(29~31・34~37・41・45)、甕(33・42)、有孔鉢(38)、高杯(47)、ミニチュア壺(44)及び石器(39・48)がある。他に1 A区では古墳時代中期~後期頃の円筒埴輪片2点(27・28)が出土しており、当溝が最終的に埋没するのはこの時期と考えられる。下層の砂層からはローリングを受けた弥生時代前期~中期の土器も少量出土している(32・43・46)。また2区では弥生時代後期の土器と共に、表面の風化の様相から旧石器時代に属すると思われる石器が1点(40)出土している。



第12図 S K13平面・断面図 (S=1/50)



1. 淡黄褐色細砂混じり粘土
2. 灰褐色粘土混じり細砂
3. 淡黃褐色粘土
4. 暗灰色粗砂混じり粘質シルト
5. 淡黃褐色粗砂混じり粘土
6. 灰褐色細砂混じりシルト
7. 灰色粗砂混じり細砂

8. 暗褐色細砂混じり粘土
9. 灰褐色細砂多混じり粘質シルト
10. 淡黃褐色細砂混じり粘質シルト
11. 灰褐色粘土混じり粗砂～細砂
12. 黒褐色細砂少混じり粘土
13. 暗褐色細砂少混じり粘土
14. 灰褐色細砂、微砂多混じり粘質シルト
15. 暗褐色細砂混じり粘質シルト
16. 暗褐色粘土混じり細砂～粗砂
17. 淡黃褐色細砂混じり粘質シルト
18. 淡黃褐色細砂混じり粘土
19. 暗褐色細砂少混じり粘土
20. 暗褐色粗砂～粘質シルトの互層
21. 淡黃褐色細砂、微砂～灰褐色粘質シルトの互層
22. 暗褐色細砂混じり粘質シルト

第13図 SD01断面図 (S = 1/30)

円筒埴輪(27・28)は明褐色を呈し、28の外側調整はタテハケである。胎土等の特徴から同一個体の可能性がある。高杯(32)は生駒西麓産の胎土を呈し、壺(43)とともに弥生時代中期に比定されるものである。ミニチュア壺(44)は手づくね成型である。壺(46)は体部外面に黒斑を有し、内面は全面剥離している。弥生時代前期～中期に比定される。

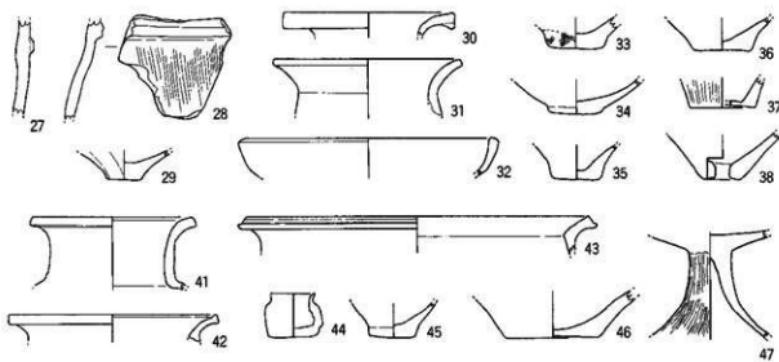
石器はいずれもサヌカイト製である。39・48はスクレイパーと考えられる。39は背部が打面となっており、腹面は一枚のポジティブ面で構成され、背面の二次加工は打面からが主である。刃部には背部からの微細な加工が認められるが、使用中の欠けと思われるやや大きな凹部もみられる。長さ7.6cm・幅4.3cm・厚さ1.0cm。48は上下に自然面を残し、腹面は一枚のポジティブ面で構成される。背部はやや摩耗している。刃部上半には微細な対向調整剥離が認められる。なお上辺にも同様の調整剥離がみられることから、先端部は錐としての機能も考えられよう。長さ9.7cm・幅4.8cm・厚さ2.3cm。旧石器(40)は横長剥片を素材とする大型のナイフ形石器の可能性がある。先端はわずかに欠損する。腹面は一枚のポジティブ面で構成され、背面には背部からの剥離調整により縦方向の稜線が生じている。刃部は内湾し、調整剥離は中央付近が背面から、上部・下部が腹面から施される。長さ7.3cm・幅3.2cm・厚さ1.0cm。

SD02

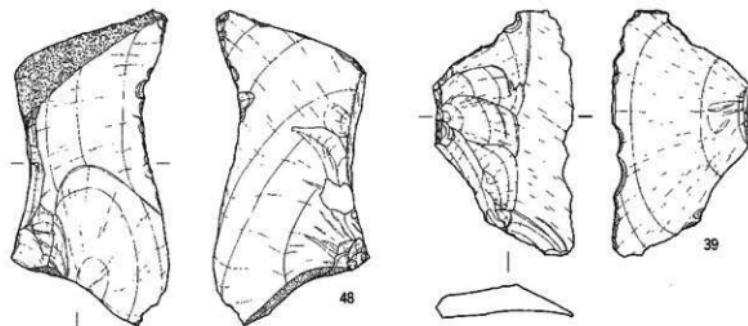
第5層上面で、1区～3区にわたって検出した東西方向の溝で、2区ではやや弧状を呈している。規模は検出長約27.8m・幅0.6m～1.0m・深さ40cm～64cmを測り、底部のレベルは東部ほど低くなっている。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色系の粘土～粘質シルトで、部分的に炭を含んでいる。SD16・



第14図 SD02断面図 (S = 1/30)

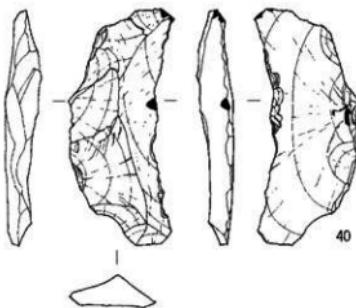


0 20cm



0 5 cm

27~29: 1区
30~40: 2区
41~48: 3区



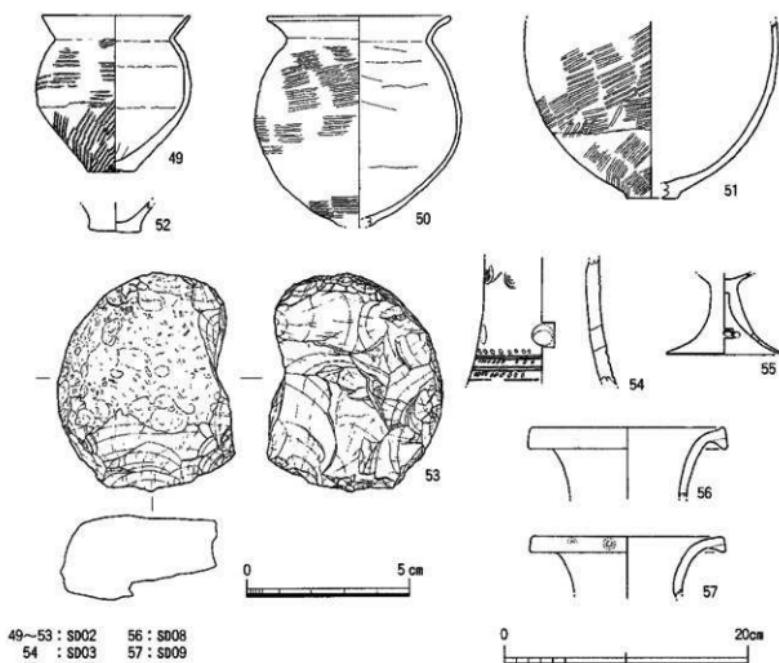
第15図 SD 01出土遺物（土器：S = 1 / 4、石器：S = 2 / 3）

S D 03 埋没後の溝である。

遺物は弥生時代後期の土器が主に上層から出土しており、甕(49~52)を図化した。他にサヌカイト石核(53)がある。甕2点(49・50)は1E区でまとまって出土している。49・50・52は胎土中に径1~2mmの長石・石英を多量に含んでいる。50は小さな平底を呈すると思われる。甕はいずれも外面が煤ける。53は石核としたが、上辺部がやや摩滅しており、敲石あるいは磨石かもしれない。背面は大きく自然面を残し、腹面には様々な方向からの加撃による複数の剥離痕が認められる。

S D 03

2E~F区で検出した北西~南東方向の直線的な溝で、第5層上面の検出である。溝の方向はE-27.5°~Nである。規模は検出長約15.1m・幅32cm~77cm・深さ10cm~22cmを測る。S D 16を切っている。断面皿状を呈し、埋土は上層が黄灰色粘土、下層が淡褐灰色微砂混じり粘土である。遺物は弥生時代後期から庄内式期の土器が少量出土しているが、図化したものは弥生時代後期に比定される器台(54)のみである。54は四方向に円形スカシを有し、外面には連続渦文・刺突文・四線文が施されている。連続渦文は三重の同心円スタンプ文を沈線で繋いだものと思われるが、沈線は摩滅のため明瞭ではない。胎土は精良で、砂粒をあまり含んでいない。



第16図 溝出土遺物（土器：S=1/4、石器：S=2/3）

S D 04

1 F 区で検出した北西—南東方向の溝で、第5層上面の検出である。規模は検出長約4.3m・幅26cm～77cm・深さ4cm～10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は黄灰色粘質シルト～粘土である。遺物は出土していない。

S D 05

1 A 区で検出した北西—南東方向の溝である。規模は検出長約3.4m・幅41cm～116cm・深さ6cm～20cmを測る。断面逆台形で、埋土は褐灰色粘土混じり細砂である。遺物は出土していない。

S D 06

3 B 区で検出した北西—南東方向の溝である。規模は検出長約3.2m・幅44cm～81cm・深さ5cm～24cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上層が灰褐色細砂多混じり粘土、下層が褐灰色細砂混じり粘土である。弥生時代後期頃の土器が少量出土しているが、図化したものは高杯(55)のみである。55は四方孔を施す。

S D 07

1～2 B 区で検出した東西方向の溝で、S D 01から分岐して西に伸びる状況である。規模は検出長約10.7m・幅23cm～63cm・深さ4cm～22cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が灰褐色粘土混じり粗砂、下層が暗黄灰色細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

S D 08

2 B 区で検出した北東—南西方向の溝で、S D 01に接続している。規模は検出長約1.7m・幅約90cm・深さ44cm～48cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はおおまかにみて上層が黄灰褐色系粘土、中層が暗黄灰色系粘質シルト、下層が灰色粘質シルトである。この上層部はS D 01上層にも落ち込んでおり、同時期に埋没していると捉えられ、両溝は同時期に機能していたと考えられる。底部のレベルでは当溝が約0.8m高い。

弥生時代後期頃の土器が少量出土しているが、図化したものは広口壺(56)のみである。

S D 09

2 C 区で検出した東西方向の溝で、S D 01に接続しており、S D 08とは対岸に位置している。規模は検出長約2.7m・幅55cm～60cm・深さ6cm～10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗黄褐色細砂混じり粘土である。

弥生時代後期頃の土器が少量出土しているが、図化したものは広口壺(57)のみである。

S D 10

2 C 区で検出した北東—南西方向の溝で、攪乱坑のため明確ではないがS D 01に接続していると思われる。位置的にみてS D 01を挟んで対岸のS D 08に連続するのかもしれない。規模は検出長約4.6m・幅34cm～128cm・深さ8cm～15cmを測る。平面不定形で北部では南に拡張している。断面逆台形を呈し、埋土は上層が暗褐灰色細砂混じり粘土(ブロック状)、下層が灰黄色細砂少混じり粘土である。

弥生時代後期～庄内式期頃の土器が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

S D 11

2 C 区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約2.0m・幅36cm～68cm・深さ6cm～10cmを測る。北部で二股に分岐している。断面皿状を呈し、埋土は暗灰黄色細砂混じり粘土である。

遺物は出土していない。

S D12

2 C 区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約1.2m・幅35cm~45cm・深さ6cm~8cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は S D11と同様暗灰黄色細砂混じり粘土である。

遺物は出土していない。

S D13

2 C 区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約1.7m・幅15cm~23cm・深さ5cm~10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰黄青色粘土である。遺物は出土していない。

S D14

3 C ~ D 区で検出した北西-南東方向の溝で、規模は検出長約11.0m・幅約1.5m・深さ約0.8mを測る。溝の方向は E -27.5° - N で、 S D01とほぼ平行している。断面逆台形を呈し、埋土は上部が淡灰褐色系粗砂混じり粘質シルト、下部が黄褐色系粗砂で、洪水等により一気に埋没した状況である。遺物は出土していない。

S D15

2 D 区で検出した南北方向の溝で、北端・南端は屈曲している。規模は検出長約3.6m・幅35cm~85cm・深さ8cm~13cmを測る。断面皿状で、埋土は上層が灰色微砂混じり粘土、下層が黄灰色微砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

S D16

S D01と同様、1 区~ 3 区にわたって検出した北西-南東方向の直線的な溝である。溝の方向は E -50° - N である。規模は検出長約37.0m・幅1.2m~2.0m・深さ0.9m~1.2mを測り、底部のレベルは 2 区西部でやや深くなっている。断面V字形に近い逆台形を呈し、埋土は黄灰色~褐灰色系の粘土・シルトを基調とし、部分的に砂層がみられる。

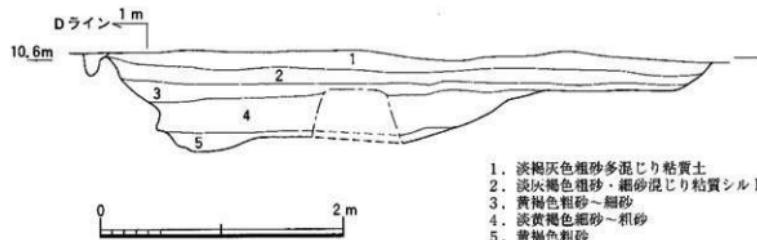
弥生時代後期の土器がごく少量出土している。

S D17

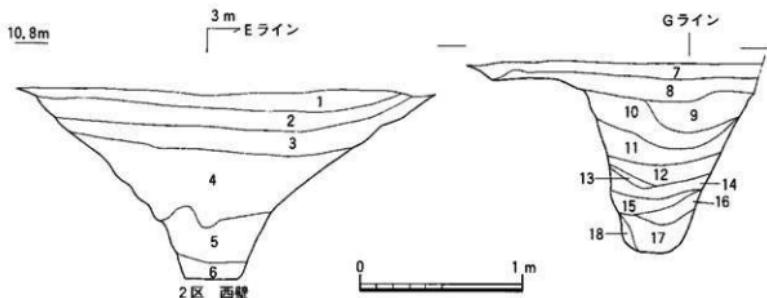
2 F 区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約8.4m・幅21cm~40cm・深さ4cm~10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

S D18

2 F 区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約1.9m・幅17cm~22cm・深さ約6cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は S D17と同様黄褐色粘土である。遺物は出土していない。



第17図 S D14断面図 (S=1/40)



- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. 黄灰色細砂少混じりシルト | 10. 淡褐色細砂混じり砂質土 |
| 2. 淡黄褐色微砂混じり粘質シルト | 11. 暗黃灰色細砂混じりシルト (マンガン含む) |
| 3. 暗灰黄色細砂少混じり粘土 (ブロック状) | 12. 淡灰褐色細砂混じりシルト |
| 4. 灰色細砂少混じり粘土 (ブロック状) | 13. 暗灰褐色細砂混じりシルト |
| 5. 青灰色粘質シルト混じり細砂・粗砂 | 14. 灰青色シルト |
| 6. 灰青色細砂混じり粘土 (ブロック状) | 15. 淡灰褐色細砂混じりシルト |
| 7. 暗灰黄色細砂混じり砂質土 | 16. 淡灰黄色微砂混じりシルト |
| 8. 淡灰黄色細砂混じり砂質土 | 17. 淡灰青色微砂混じり粘質シルト |
| 9. 暗褐色細砂混じり粘質土 | 18. 淡青色シルト |

第18図 S D 16断面図 ($S = 1/30$)

S D 19

2 F区で検出した南北方向の溝である。規模は検出長約2.6m・幅15cm~19cm・深さ約5cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は淡黄灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

S D 20

1 F区で検出した東西方向の溝である。規模は検出長約2.4m・幅29cm~49cm・深さ4cm~20cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から褐灰色粘土混じり粗砂、暗褐色微砂混じり粘土、灰黄色微砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

S O01

3 E~F区西壁際で検出した落ち込みで、西部は調査区外に至り平面形は不明である。溝である可能性もある。規模は南北11.0m以上・東西1.0m以上・深さ6cm~14cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は上から淡褐色細砂混じり粘土、暗黄灰色粘土、灰褐色細砂混じり粘土である。

遺物は弥生時代後期に比定される土器が出土しているが、図化したものは壺底部(26)のみである。

ピット

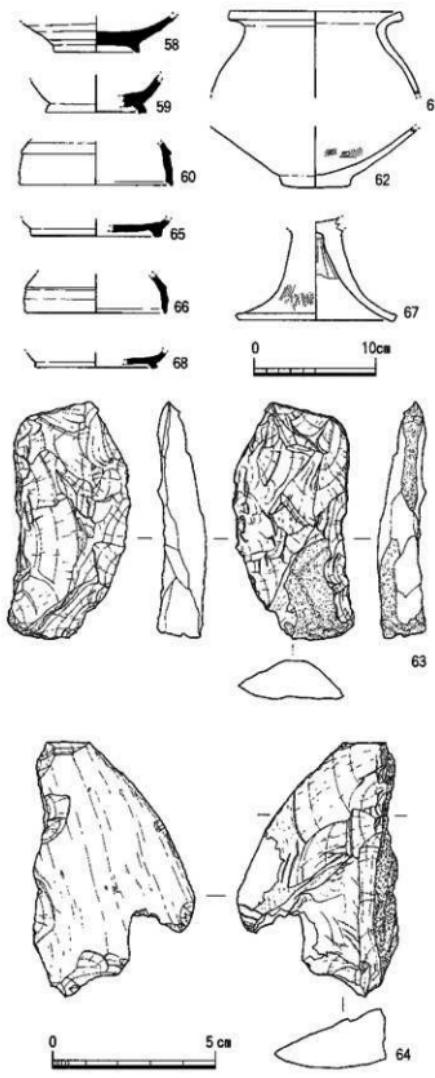
主に調査地の南半部で検出された。2 E区S P 20~22は北西~南東方向に約4.0mにわたり一列に並んでおり、法量的にみても共通性が認められ、掘立柱建物を構成するピットである可能性がある。他のピットには特に規則性はみられなかった。S P 39はS D 16埋没後の遺構である。またS P 31・33・34はS O01の底部で検出したピットで、S P 32はS O01に切られている。

ピットから遺物は出土していない。

法量等は表2にまとめた。

SP	地区	平面形	径	深さ	埋 土
01	1 A	不明	34×19以上	14	褐色粘土混じり細砂・粗砂
02	1 A	不明	29×27以上	8	タ
03	1 C	楕円形	25×17	8	暗灰黄色粘質土
04	1 C	楕円形	42×31	10	タ
05	1 C	不定形	18×17	12	タ
06	1 C	不定形	70×50	12	タ
07	1 C	不定形	65×37	12	タ
08	1 C	不明	36×21以上	10	タ
09	1 D	楕円形	27×23	9	タ
10	1 D	円形	34×30	9	タ
11	1 D	円形	24×24	10	灰黄色細砂混じり粘質土
12	1 E	楕円形	28×17	12	黄灰褐色粘質土・暗灰黄色粘質土
13	1 E	楕円形	22×14	12	タ
14	1 F	円形	26×22	12	タ
15	1 F	偏円形	43×25	17	タ
16	1 F	不明	10×23以上	12	黄灰褐色粘質土
17	2 D	楕円形	36×25	25	灰黄色粘質シルト・灰黄褐色細砂混じり粘土・灰黄色微砂混じり粘土
18	2 D	円形	32×28	3	暗灰色粘土
19	2 E	円形	50×48	20	黄褐色細砂混じりシルト・黄灰褐色粘質シルト
20	2 E	楕円形	31×23	30	暗灰黄色微砂混じり粘土・粘質シルト
21	2 E	円形	31×23	36	暗褐色微砂混じり粘質シルト・細砂混じり粘土
22	2 E	円形	31×24	46	褐灰色微砂混じり粘土・灰褐色細砂混じり粘土・暗灰色粘土
23	2 F	円形	31×26	18	黄褐色微砂混じり粘土
24	2 F	楕円形	78×43	26	淡黄褐色粘土
25	2 F	円形	34×32	23	灰黄褐色粘土
26	3 B	円形	20×18	9	灰褐色細砂混じり粘土
27	3 B	楕円形	28×19	7	褐灰色粗砂多混じり粘土
28	3 B	不明	29×37以上	8	タ
29	3 E	不定形	37×29	19	灰黄褐色シルトブロック～細砂混じり粘土・褐色微砂混じり粘土
30	3 E	円形	26×23	12	灰褐色粗砂多混じり粘質シルト
31	3 E	円形	29×22	10	褐灰色細砂混じり粘土・灰黄色細砂混じり粘土
32	3 E	不定形	81×53	13	淡灰黄色細砂混じりシルト
33	3 E	偏円形	22×18	6	灰褐色粗砂混じり粘土
34	3 E	偏円形	82×59	13	褐灰色細砂混じり粘土・灰褐色微砂混じり粘土
35	3 F	円形	27×23	19	淡灰黄色粘土混じりシルト・褐灰色粘土混じりシルト
36	3 F	楕円形	50×36	31	灰褐色シルト
37	3 F	不明	19×15以上	10	暗灰黄色粘土混じりシルト
38	3 F	不明	23×17以上	11	タ
39	3 F	円形	33×29	12	淡灰褐色微砂混じり粘土
40	3 F	不明	33×34以上	17	淡灰褐色微砂混じり粘土・褐色粘土混じりシルト～微砂
41	3 F	楕円形	36×27	13	淡灰褐色微砂混じり粘土
42	3 F	不定形	37×17	5	タ

表2 ピット (SP01~42) 法量表



包含層出土遺物

58~64が1区、65~67が2区、68が3区からの出土である。椀底部（58）は11世紀前半頃に比定される灰釉陶器〈椀B〉と思われるが断定はできない。灰白色を呈し、底部外面中央には糸切り痕が認められ、断面三角形の高台は貼付けである。

須恵器（59）は壺等の底部である。杯蓋（60・66）は5世紀末～6世紀前半に比定される。杯（65・68）は奈良時代のものであろう。

弥生土器壺（61）・壺（62）・高杯（67）は後期に比定される。67は牛駒西麓産の胎土である。

石器（63・64）はサスカイト製で、スクレイパーとした。63は上面、下面、及び背面・背部の一部に自然面を残す。全面には様々な方向からの加撃による複数の剥離痕が認められる。刃部は外湾しており、下半は主に背面からの加工による。また背部の下半にも腹面側からの調整により刃が形成されている。やや風化が進んでいる。長さ7.3cm・幅3.8cm・厚さ1.2cm。64は背部が自然面となっており、腹面は一枚のポジティブ面で構成される。刃部には明確な調整剥離はみられない。長さ7.8cm・幅5.0cm・厚さ1.8cm。

第19図 包含層出土遺物(土器: S = 1/4、石器: S = 2/3)

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末を主とする遺構・遺物が検出された。遺構では井戸・土坑・溝・ピットが検出され、当地が居住域であったことが確認された。主な遺構としては、大規模な3条の溝（S D01・14・16）が挙げられる。いずれも北西—南東方向の直線的な溝で、S D16は断面V字形に近いものであり、集落を画する溝・水路等の性格が考えられる。

庄内式期に入る遺構もあると思われるが、出土遺物の量は希薄であり集落域とは言い難い。本調査の契機となった遺構確認調査においては、北部で庄内式期の土器の出土が顕著であり、当該期の集落域の中心は北部にあるものと考えられる。弥生時代後期の集落域が北に移動したとも考えられよう。

当調査地の近隣ではあまり発掘調査は実施されていないが、南約200mで当調査研究会が実施した第1次調査において、弥生時代後期では方形周溝墓12基、古墳時代中期～後期では方墳3基からなる墓域が確認されており、今回検出された弥生時代後期の居住域や、また円筒埴輪片との関連が注目される。なお埴輪を伴う古墳としては、北西約400mでの第8次調査で検出された中期の方墳2基がある。

また弥生時代後期の溝（S D01）からは、二次堆積ではあるが旧石器時代に属すると思われる石器が出土している。そして下層調査では石器の出土はなかったものの、旧石器時代相当層である長原13層・14層の存在が確認された。当遺跡では旧石器出土地点として第1地点～第6地点の6箇所が確認されている（第1図・表1）。今回の調査地は、第3地点と他の地点との間に位置し、旧石器時代研究においてこれまで不明確であった部分であり、今回の成果はその一助となるものといえよう。

註

- 註1 八尾南遺跡の概要については下記の文献に詳しい。また集落の変遷についても考察されている。
原田昌則 1995「I 八尾南遺跡（第8次調査）」「八尾南遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告47」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註2 趙 哲済 1995.3「II章 長原遺跡の地層」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告書」財団法人大阪市文化財協会
- 註3 趙 哲済・大阪市石器研究会 1994.10「長原遺跡における旧石器調査の現状－特に層序と古地理について－」『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会
- 註4 米田敏幸 1995「19. 八尾南遺跡（94-125）の調査」「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書 I」八尾市教育委員会
- 註5 財団法人大阪市文化財協会 田中清美氏に、現地において長原遺跡標準層序との対比をしていただいた。狭いトレンチ内のしかも限られた一部分ということもあり断定はできないということであった。
- 註6 火山ガラスの認定は、筆者による土層サンプリング・焼かけ法によるもので、試料の観察には倍率30×の顕微鏡を使用した。
- 註7 山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」「概説 中世の土器・陶磁器 中世土器研究会編」真陽社



図版



1区 全景（南から）



2区 全景（北から）



3区 全景（北から）



3区南端部 全景（北から）



S E01 (南から)



S E01底部 土器 (1・2) 出土状況 (東から)



S K02 (南から)



S K07 (北から)



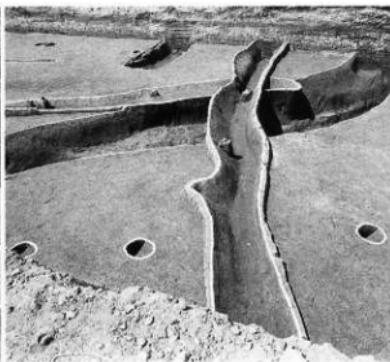
SD01〈2区〉(南東から)



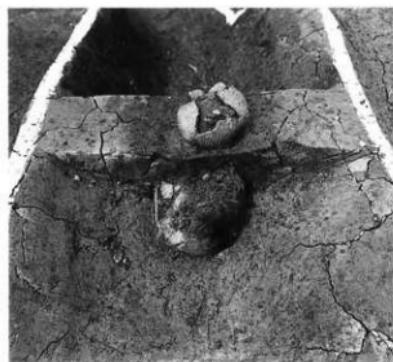
SD01〈2区〉(北西から)



SD01〈3区〉東壁



SD02〈2区〉(東から)



SD02〈1区〉土器(49・50)出土状況(東から)



SD02〈3区〉東壁

図版4



SD14〈3区〉(北から)



SD16〈2区〉(南東から)



SD16〈2区〉西壁



SD16〈3区〉(北西から)



SD16〈3区〉東壁



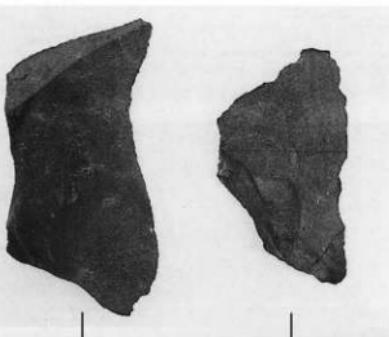
3E区東壁下層



SE01 (1・2)、SK02 (7)、SK07 (11・12・21・22・24)



16

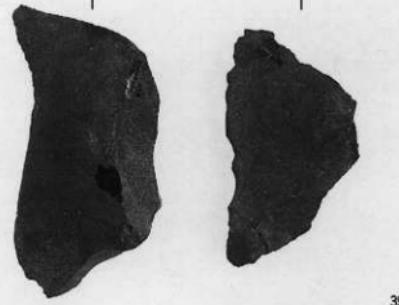


48

39

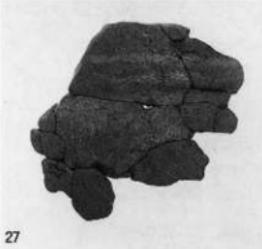


17

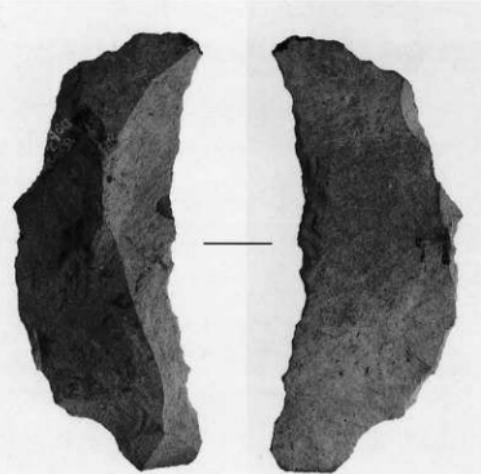


48

39



27



28

40

S K 07 (16・17)、S D 01 (27・28・39・40・48)



S D 01 (41・44)、S D 02 (49～51)、S D 03 (54)、1区包含層 (58)



53



63



64



S D02 (53)、1区包含層 (63・64)

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく61								
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告 61								
調査名	I 小阪合遺跡（第26次調査） IV 中田遺跡（第30次調査）	II 東郷遺跡（第44次調査） V 東弓削遺跡（第7次調査）	III 中田遺跡（第26次調査） VI 八尾南遺跡（第21次調査）						
卷次									
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告								
シリーズ番号	61								
編著者名	I・II・IV・VI 坪田真一 III 岡山清一 V 成海純子								
編集機関	財團法人八尾市文化財調査研究会								
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700								
発行年月日	西暦1998年9月								
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
小阪合遺跡 (第26次調査)	大阪府八尾市青山町 2丁目219番地	27212		34度 37分 18秒	135度 36分 49秒	19930901 ～ 19931004	420	共同住宅建設	
東郷遺跡 (第44次調査)	大阪府八尾市光町 1丁目39・40・41	27212		34度 37分 11秒	135度 36分 23秒	19940110 ～ 19940209	370	ホテル等建設	
中田遺跡 (第26次調査)	大阪府八尾市中田 1丁目20, 21-2, 22-2, 33	27212		34度 36分 33秒	135度 37分 18秒	19940704 ～ 19940715	約270	共同住宅建設工事	
中田遺跡 (第30次調査)	大阪府八尾市前部 2丁目地内	27212		34度 36分 45秒	135度 37分 25秒	19950920 ～ 19951013	約56	公共下水道工事	
東弓削遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市八鳴木東 1丁目地内	27212		34度 36分 26秒	135度 37分 12秒	19940408 ～ 19940518	48	公共下水道工事	
八尾南遺跡 (第21次調査)	大阪府八尾市若林町 2丁目13, 15	27212		34度 35分 27秒	135度 35分 17秒	19950327 ～ 19950427	742, 8	遊戯場建築	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
小阪合遺跡 (第26次調査)	集落遺構	古墳時代前期	河川	布留式土器	古墳時代中期～平安時代の集落城を確認。				
		古墳時代中期～後期	掘立柱建物・土坑	土師器・須恵器・製塩器	古墳時代中期の土坑から良好な括資料が出土。				
		平安時代	曲物井戸・溝・地鎮壇	土師器・瓦器・陶磁器					
東郷遺跡 (第44次調査)	集落遺構	古墳時代前期	掘立柱建物・井戸・土坑・ピット	庄内式土器・布留式土器	古墳時代前期・平安時代の集落城の括がりを確認。				
		平安時代	溝	土師器・瓦器	古墳時代前期の多量の搬入土器が出土。				
中田遺跡 (第26次調査)	集落遺構	古墳時代前期	土坑	布留式土器	集落城の括がりを確認。				
		鎌倉～室町時代	井戸・小穴	土師器・瓦器					
中田遺跡 (第30次調査)	集落遺構	古墳時代前期	包含層	布留式土器	古墳時代中期～室町時代の集落城を確認。				
		古墳時代中期～後期	土坑・溝	土師器・須恵器・埴輪・青白釉製軽轆車					
		平安時代～室町時代	土坑・溝・ピット	土師器・瓦器・陶磁器・瓦					
東弓削遺跡 (第7次調査)	集落遺構	古墳時代前期	落ち込み	庄内式土器・布留式土器	小型・精製器種を中心とした土器が多量に出土。				
八尾南遺跡 (第21次調査)	集落遺構	弥生時代後期～古墳時代中期	井戸・土坑・溝	弦纹土器(V様式) 石器	弥生時代後期の集落域の括がりを確認。				

財団法人八尾市文化財調査研究会報告61

- I 小阪合遺跡（第26次調査）
- II 東郷遺跡（第44次調査）
- III 中田遺跡（第26次遺跡）
- IV 中田遺跡（第30次遺跡）
- V 東弓削遺跡（第7次遺跡）
- VI 八尾南遺跡（第21次遺跡）

発行 平成10年9月
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX(0729)94-4700
印刷 梶近畿印刷センター
表紙 レザック66 <70kg>
本文 書籍用紙 <70kg>
図版 マットアート <135kg>

